

熊本県文化財調査報告 第89集

袈裟尾丸山古墳

1987

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第89集

袈裟尾丸山古墳

1987

熊本県教育委員会

序 文

農業の近代化をめざす県営農業基盤整備事業は、県下の各地で実施されており、施工面積が広範囲におよぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきております。

施工区内に含まれる文化財の取扱いについては、事前に地元や農政部局と協議を行ない、保存できるものについては極力保存に努めているところであります。やむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存の措置をとっております。

ここに報告する袈裟尾丸山古墳は、昭年59年度県営畠地帯総合土地改良事業（うてな台地地区）に伴って発掘調査を実施したものであります。発掘に先立ち試堀調査を実施し、その結果をもとに現状保存の申し入れを行ない、関係部局と協議を重ねましたが、全体的な設計施工の上から現状保存は困難との結論に達し、発掘調査を実施したものです。

袈裟尾丸山古墳は、袈裟尾高塚古墳・袈裟尾茶臼塚古墳とともに袈裟尾古墳群を形成するものであります。高塚古墳は県指定史跡として保存・整備が計られておりますが、茶臼塚古墳については今回の協議を通じて関係者の努力により現状保存が計られることとなりました。文化財保護の主旨からみて、誠に喜ばしいことであると思います。

袈裟尾丸山古墳の調査成果を報告するにあたり、この成果が学術的研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財愛護などに役立てられることを願って止みません。

最後に、保存問題・調査などについて終始御協力を受けた菊池市をはじめ、県農政部耕地第一課、県菊池事務所耕地課、菊池市教育委員会、および地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

熊本県教育長 伴 正 善

例　言

1. 本書は、県営畠地帯総合土地改良事業（うてな台地地区）に伴い、昭和59年度に発掘調査を実施した袈裟尾丸山古墳の調査報告である。
2. 調査は、県農政部耕地第一課（県菊池事務所耕地課）の依頼を受けて、熊本県教育庁文化課が実施した。
3. 調査は、県農政部耕地第一課の委託事業、及び国庫補助事業「県内ほ場整備地区遺跡発掘調査」として実施した。
4. 本書の執筆は、松本健郎・古森政次・坂田和弘が協議・分担して行った。IV-2（袈裟尾茶臼塚古墳）については富田紘一氏（熊本市立博物館学芸員）に執筆を依頼した。
5. 本書に使用した挿図は、測量図・遺構実測図は古森・坂田、遺物実測図は松本・古森が作成し、製図は松本・瀬丸延子が行った。写真撮影は、遺構関係を古森、遺物を松本が担当した。
6. 袈裟尾高塚古墳については、菊池市教育委員会・文化財保存計画協会から資料の提供をうけた。袈裟尾茶臼塚古墳については、熊本市立博物館から資料の提供を受けた。
7. 施工区の1/1000地形図は県菊池事務所耕地課から提供を受けた。
8. 袈裟尾丸山古墳の実測図・写真、出土遺物等の資料は、熊本県文化財収蔵庫に保管している。
9. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、松本が担当した。

本文目次

I 裂波尾丸山古墳とその周辺

1	裂波尾古墳群の位置	1
2	裂波尾古墳群研究小史	2
3	周辺遺跡の概要	3

II 調査の経過

1	調査に至る経過	7
2	試掘調査と保存協議	7
3	調査経過	10
4	調査の組織	11

III 裂波尾丸山古墳の調査

1	古墳の立地	12
2	墳丘	14
3	内部主体	16
4	出土遺物	19

IV 裂波尾古墳群の概要

1	裂波尾高塚古墳	25
2	裂波尾茶臼塚古墳	33

V 考察

1	裂波尾丸山古墳の構造と規模	38
2	裂波尾丸山古墳の年代	39
3	裂波尾古墳群の形成（台地の古墳の動態）	40

挿図目次

第1図	袈裟尾古墳群の位置	1
第2図	台地遺跡分布図	3
第3図	袈裟尾丸山古墳墳丘測量図(調査前)	8
第4図	袈裟尾古墳群地形図	13
第5図	袈裟尾丸山古墳墳丘測量図(調査後)	14
第6図	袈裟尾丸山古墳墳丘断面図	15
第7図	袈裟尾丸山古墳主体部実測図	17
第8図	袈裟尾丸山古墳出土遺物実測図	19
第9図	袈裟尾丸山古墳出土遺物実測図	20
第10図	袈裟尾丸山古墳出土遺物実測図	21
第11図	袈裟尾丸山古墳出土遺物実測図	22
第12図	袈裟尾高塚古墳墳丘測量図	25
第13図	袈裟尾高塚古墳石室実測図	27
第14図	袈裟尾高塚古墳石室復原実測図	28
第15図	石製品実測図	29
第16図	袈裟尾高塚古墳主体部奥壁装飾文実測図	30
第17図	袈裟尾茶臼塚古墳石室実測図	33
第18図	袈裟尾茶臼塚古墳出土遺物実測図	35
第19図	袈裟尾茶臼塚古墳出土遺物実測図	36

図版目次

- 図版 1 台地・袈裟尾古墳群航空写真
1.台地全景(西方から) 2.袈裟尾古墳群(工事後)
- 図版 2 周辺遺跡
1.岡田の巨石(支石墓参考地) 2.山崎古墳 3号石棺 3.山崎古墳
3号石棺 4.山崎古墳 3号石棺 5.十五社宮古墳 6.十五社宮古
墳の石棺材 7.古山古墳 8.樋之口(A)横穴群
- 図版 3 袈裟尾丸山古墳の墳丘
1.高塚古墳(南東)から見た丸山古墳 2.東から見た丸山古墳
- 図版 4 袈裟尾丸山古墳の墳丘と周辺の古墳
1.丸山古墳の墳丘(調査後) 2.丸山古墳から高塚・茶臼塚古墳を
望む
- 図版 5 袈裟尾丸山古墳
1.墳頂部の状態(試掘後) 2.墳頂部完掘状態
- 図版 6 袈裟尾丸山古墳の主体部
1.盗掘坑断面と石材の出土状態 2.石材の出土状態
- 図版 7 袈裟尾丸山古墳の主体部
1.主体部完掘状態 2.主体部完掘状態
- 図版 8 階段状遺構
1.階段状遺構の検出状態 2.階段状遺構土層断面
- 図版 9 丸山古墳の出土石材
1.天井石と思われる石材 2.出土した小礫(砾床)
- 図版10 袈裟尾丸山古墳出土遺物
- 図版11 袈裟尾丸山古墳出土遺物
- 図版12 袈裟尾丸山古墳出土遺物
- 図版13 袈裟尾丸山古墳出土遺物
- 図版14 袈裟尾丸山古墳出土遺物
- 図版15 袈裟尾丸山古墳出土遺物
- 図版16 袈裟尾高塚古墳
1.調査前の墳丘 2.墳丘と石室 3.玄室 4.玄室根石の状態
5.楣石として使用されていた石製品 6.復原された墳丘
- 図版17 袈裟尾茶臼塚古墳
1.墳丘上の石材 2.玄室奥壁根石の残存状態
- 図版18 袈裟尾茶臼古墳
1.玄門から北側の側壁残存部 2.側壁の石積み
- 図版19 袈裟尾茶臼塚古墳出土遺物
- 図版20 袈裟尾茶臼塚古墳出土遺物

I 裂波尾丸山古墳とその周辺

1 裂波尾古墳群の位置（第1・2図）

裂波尾古墳群は、裂波尾高塚古墳
・裂波尾茶臼塚古墳・裂波尾丸山古
墳の3基の円墳で構成されている。

前二者の所在地は菊池市裂波尾字高
塚、後者は菊池市稗方字高塚である。
後二者は、従来「茶臼塚古墳」・
「丸山古墳」と呼ばれていたが、同
名の古墳は他にも多く存在し混同す
る恐れがあるため、裂波尾高塚古墳
と同様に「裂波尾」を冠して呼称す
ることとした。

古墳群の位置する台地は、台台地
と呼ばれ、菊池川の右岸にはほぼ東西
にのびた洪積台地である。現在の行
政区分では、台地の東側三分の一は
菊池市、西側約三分の二は菊池郡七城町に属している。

台地上の標高は、70~100m前後の所が多いが、古墳の立地する台地の北東部付近は比較的
高くなっている、120~130mである。とくに、裂波尾高塚古墳からの眺望はよく、眼下に菊池
平野を見下し、対岸の花房台地を遠望するなど、墳墓の地としての立地条件を備えている。台
台地の東端は迫間川、西端は木野川によって画されており、南側は迫間川・菊池川の平野に面
している。北側はさらに北方の丘陵・台地へと続くが、小河川などによる浸食谷が発達してお
り、やや複雑な地勢を呈している。

迫間川は、台台地の東端を南流し、台地の東南端で西へ曲がり、台地の裾部に沿って西流し、
やがて菊池川に合流する。菊池市の市街地である隈府は、迫間川が屈曲する地点の左岸に位置
する。裂波尾古墳群は、この市街地の西北方約2kmに位置する。

台台地の南側を流れる菊池川は、阿蘇外輪山の一画に源を発し、いくつかの支川を集めて有
明海に注いでいる。全長約61km、流域面積約996km²で、白川・緑川・球磨川と並び熊本の四大
河川に数えられる。上流部は、菊池渓谷に代表される景勝の地が多いが、菊池市街地（隈府）



第1図 裂波尾古墳群の位置

の南側付近から広大な菊鹿平野を形成する。この平野は、阿蘇凝灰岩台地を削って形成されたもので、約76km²の面積がある。両岸には凝灰岩台地が残されており、台地もその一つである。平野と台地の境には、いたるところに凝灰岩の岩壁が露呈しており、これらの岩壁に多くの横穴墓が残されている。

菊鹿平野は、県下有数の穀倉地帯であると共に、文化財の宝庫でもある。旧石器時代から歴史時代に至るまで多数の遺跡が知られているが、下流の玉名平野周辺と共に特色ある古墳文化を形成している。とくに、県下の装飾古墳の半数以上が菊池川流域に集中し、舟形石棺の多いことでも古くから注目されているところである。

2 装飾尾古墳群研究小史

装飾尾高塚古墳の学術的な最初の調査は、昭和5年7月、坂本経堯氏により行なわれている。坂本氏の残された調査記録は註1文献に収録されているが、墳丘見取図、石室実測図、装飾文様実測図、副葬品の一覧、古墳の概要解説など詳細にわたるもので、昭和初期の古墳の概要や出土品などを知る絶好の資料である。

坂本氏は、昭和10年1月にも同古墳を再調査され、石室の見取図を残されている。この時の調査でも若干の遺物が出土しているようである。

昭和41年4月15日、装飾尾高塚古墳は菊池市の史跡に指定されている。

昭和49年8月、上妻信寛教諭の指導のもとに、鹿本高校考古学部による石室の清掃と実測調査が実施された。

昭和50年7月31日、熊本県の史跡に指定されたが、墳丘・石室の損壊が著しく、装飾文様の保護、文化財の活用等のために昭和53年度から昭和55年度にかけて、菊池市教育委員会が事業主体となって保存修理事業が実施された。事業の初年度（53年度）には、保存修理の基礎資料収集のための調査が行なわれ、墳丘測量、墳丘の構造調査、石室実測図の作成などの考古学的な調査のほか、地質調査・土壤分析、石室の構造工学的調査等、多岐にわたる総合的な調査が行なわれている。この調査では、須恵器・土師器・鉄器・耳環等が出土し、櫛石として使用されていた石材が鞠の石製品であることが確認された。

昭和54年度・昭和55年度は主に保存修理工事が行なわれ、装飾尾高塚古墳は装いを一新して保存・活用が計られるようになった。3ヵ年にわたる調査・保存工事の詳細は「装飾尾高塚古墳保存修理工事報告書」^{註2}として発刊されている。

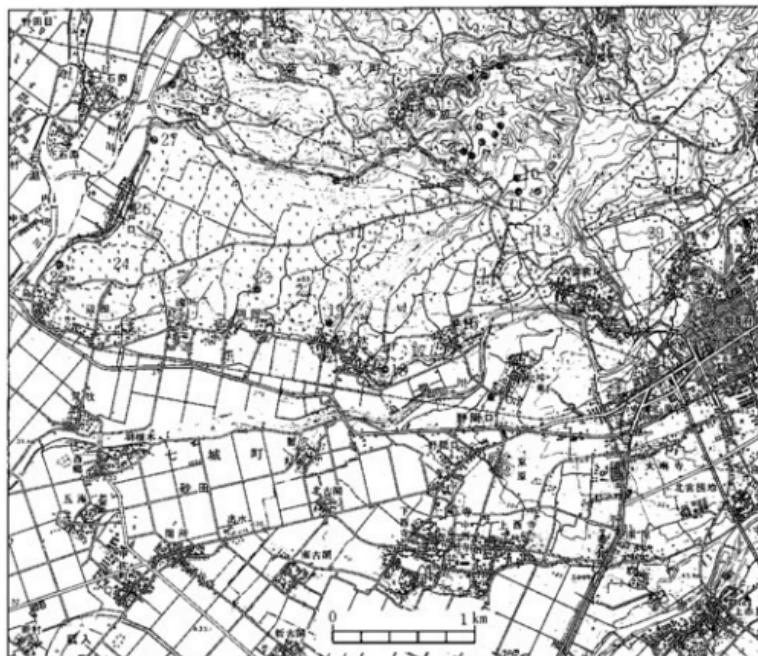
装飾尾茶臼塚古墳は、開墾や盗掘などによって著しく変形している。昭和42年10月、熊本市立博物館によって応急的な調査が行なわれ、横穴式石室の実測が実施されている。幸い、盗掘によって出土した遺物の一部が回収され、熊本市立博物館に保管されている。詳細については、

調査を担当された富田鉢一氏の報文を後章に収めているので参照されたい。

袈裟尾古墳群のうち上記の二古墳については、調査が加えられ、その概要が知られていたが、
袈裟尾丸山古墳については全く未調査であった。

註1 文化財保存計画協会編「県史跡・袈裟尾高塚古墳保存修理工事報告書」菊池市教育委員会 1981

3 周辺遺跡の概要（第2図）



第2図 台地遺跡分布図

1 山田横穴群	2 桶之口(A)横穴群	3 桶之口(B)横穴群	4 井畠谷横穴群
5 大井穂(B)横穴群	6 大井穂(A)横穴群	7 大井穂(C)横穴群	8 大井穂(D)横穴群
9 大井穂(E)横穴群	10 袈裟尾丸山古墳	11 袈裟尾茶臼塚古墳	12 袈裟尾高塚古墳
13 西村上遺跡	14 竹ノ上原遺跡	15 山崎古墳	16 神来遺跡
17 十蓮寺跡(石棺)	18 十五社宮古墳	19 水次古墳	20 ヒジュウ谷横穴群
21 一本松遺跡	22 岡田遺跡	23 岡田支石墓(参考地)	24 うてな遺跡
25 台古墳	26 濑戸戸横穴群	27 馬頭(北上原)古墳	28 豊水横穴群
29 玉祥寺遺跡			

ここでは袈裟尾古墳群と同じ台台地に位置する遺跡について概観し、袈裟尾古墳群が出現する歴史的な背景について素描してみたい。

台台地では、今のところ旧石器（先土器）時代の遺跡は知られていない。もっとも古い遺物は、竹の上原遺跡から出土している縄文時代前期の円筒土器であるが、量的には少ない。周知されている遺跡ではないが、岡田の集落の上方の台地には後期の土器の散布がみられる（仮称・岡田遺跡）。

縄文後・晩期の遺跡は、竹の上原遺跡で土器や石器が出土しているほか、西村上遺跡、一本松遺跡が知られている。竹の上原遺跡では、遺物は散発的な出土状態で、遺構も確認されていない。西村上遺跡は、昭和58年度の遺跡分布調査で発見し、昭和59年度に確認調査を行った。遺跡の東側は平安時代、西側は縄文時代晩期を主体とする複合遺跡である。縄文時代の包含層の部分は、設計変更によって保存されることになったが、試掘地点では良好な包含層が確認されており、住居跡などの遺構が存在する可能性が高い。一本松遺跡は、調査などは行われておらず、詳しい内容は不明であるが、後・晩期の土器、勾玉などが採集されており、大規模な遺跡と考えられる。

弥生時代は、岡田の上方の台地に中期（黒髮式）の土器が散布する（仮称・岡田遺跡）ほか、後期の遺跡が4箇所知られている。玉祥寺遺跡は台台地東南部の段丘面に位置し、江戸時代に銅鋸を出土している注目すべき遺跡であるが、遺跡の実態については判然としていない。昭和60年度に発掘調査を実施した竹の上原遺跡では、後期の住居跡が検出されているが、調査地点が遺跡の中心部から外れており、3棟が発見されているにすぎない。遺跡の中心は、調査地点の西側に広がっていると考えられる。

十蓮寺跡の南、台地の南端は、十五社宮古墳や神尾城跡として知られているが、付近一帯には弥生時代後期の土器が散布しており、集落跡と考えられる。

台地の西端部に位置するうてな遺跡は、昭和61年度の試掘調査で弥生後期と古代が複合した大遺跡であることが判明した。弥生時代の遺跡の広がりは、東西約400m、南北約200mにおよび、環濠を伴う大集落である。試掘溝の多くの地点で住居跡が確認されている。

台台地に位置するものではないが、台地の南側の平野に位置する神来遺跡は、支石墓の可能性が強い。また、岡田から台地に登る農道の脇に2mを超える安山岩の巨石（図版2-1）があり、これも支石墓の可能性があるが、未調査のため詳細は不明である。

台台地の古墳は、袈裟尾古墳群を含む台地東部の群と、台地西端の群とに大別される。東部の群は、西の方に年代の古いものがあり、古墳の規模の上では袈裟尾古墳群で盛期を迎え、台地の北東、北側の横穴群へと連続している。

山崎古墳は、次のような3基の石棺が知られている。

1号石棺 舟形石棺 人骨（1体）・鉄錠（8）

2号石棺 箱式石棺 人骨（2体）

3号石棺 家形石棺

1・2号石棺は、昭和7年、開墾中に発見されたもので、2尺（約60cm）の間隔で並列して検出されている。1・2号石棺は、現在は埋め戻されていて、棺の詳細な構造などは不明であるが、同時又はきわめて近接した時期と考えられる。3号石棺は、1・2号石棺の南西約20mの所から道路拡幅によって出土したものであるが、1・2号石棺より古く発見されており、出土品などは不明である。3号石棺の棺材の一部（図版2-2～4）は、1・2号石棺の近くに保存されている。墳丘の有無などについては不明であるが、一帯の地形からみて大規模な墳丘があったとは考えがたい。

十五社宮古墳（図版2-5・6）は、菊池十八外城の一つである神尾城跡の一角にあり、城や神社の造成でかなり変形している。現況では直径約10m、高さ約1.5mの規模である。残丘の状態からみて円墳と考えられる。主体部は箱式石棺で、赤色顔料を塗布した安山岩の棺材の一部が破壊されて露出している。埴輪や出土遺物などは知られていない。この古墳の北側約100mに平安時代の十蓮寺廃寺がある。昭和40年に行われた十蓮寺廃寺の発掘調査の時、寺院跡の一画から家形石棺が1基出土している。^{図3}詳しい報告はないが、人骨2体と鉄歿が出土したと報道されている。

横穴群は、菊池市木野（堀切）の周辺に2大群・9小群がある。組織的な調査は行われておらず、破壊されたものや埋没しているものもあるが、昭和62年の踏査時には50数基を数え、本来の総基数は100基以上になるものと思われる。

堀切の集落の北東にある群は、堀切から稗方に抜ける道路に沿って3小群がある。この付近の岩質は硬く、横穴の遺存状態は良い。横穴の内部構造は、コの字形屍床で、立面形は家形を呈するものが多い。堀切の集落と袈裟尾古墳群との間にある群は、6小群に分かれる。この群の岩質は、溶結度の低い軟質の凝灰岩で、崩壊が進み、遺存状態は悪い。内部構造の観察できるいくつかの横穴は、上記の群と同様なものである。

堀切付近の横穴群から出土したという遺物が熊本市立博物館に所蔵されている。この遺物は、昭和60年、熊本市文化課の山田康弘氏が工事の作業員から入手されたもので、須恵器・土師器がある。完形品も含まれており、時期的には6世紀後半～7世紀のものである。現地の踏査結果では、大井樋D横穴群で近年、道路工事・採土などが行われており、他の群では工事の形跡がみられないことから、大井樋D横穴群からの出土品である可能性が強い。

台地の北側の谷にもヒュウ谷横穴群があるが、基數は少ない。

台地の西端には、台古墳、馬頭（北上原）古墳（仮称）の2基の円墳の他、瀬戸口横穴群がある。台古墳は台地の西南端に位置し、直径30m前後の比較的規模の大きな円墳である（図版2-7）。未調査で、盗掘も受けておらず、主体部などは不明である。馬頭（北上原）古墳は、

台地の西北端に位置する。昭和62年2月、農道工事中に新たに発見されたもので、墳丘はかなり変形しているが、復原すると直径20—25mとなり、周溝が巡っている。主体部は舟形石棺であるが、盗掘を受けており、棺蓋は破壊され、副葬品は見つかっていない。

台地の西側の崖面には瀬戸口横穴群がある。約250基が確認されており、埋没しているものを含めると、総数は300基を超えるものと考えられる。県下で最大規模の横穴群である。瀬戸口横穴群はかって6基が調査され、須恵器、鉄鎌、鉄斧、雲珠、亀甲などが出土している。^{註4}
瀬戸口の北側、豊水川の対岸にも約30基の横穴群がある。^{註5}

その他、水次の集落の北西の台地端部に小円墳があり、土師器が採集されている。^{註6}

歴史時代は、竹の上原遺跡で7・8世紀、西村上遺跡で平安時代の住居跡群が検出されており、うてな遺跡の試掘でもカマド付きの住居跡が多数確認されている。

十蓮寺跡は、古くから古代寺院跡として知られている。塔の心礎は現在も露出しており、瓦の破片などが採集される。昭和40年に一部の確認調査が行われ、法起寺式の伽藍配置が想定されている。^{註7}

註1 嘉永2年出土。東京国立博物館蔵。

註2 九州日報 昭和7年9月9日 九州日日新聞 昭和7年9月11日

註3 熊本日日新聞 昭和40年4月15日

註4 昭和37年、原口長之・田辺哲夫氏等によって基數確認と3基の発掘調査が実施されている。鉄斧・鐵鑓・雲珠・亀甲が出土。

田辺哲夫編「瀬戸口横穴群」『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社 1980

また、昭和55年、県道改良工事に伴って3基を発掘調査したが、出土遺物はなかった。

杉村彰一「瀬戸口横穴群」『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書』熊本県文化財調査報告第51集 1980

註5 富田統一氏採集・保管

註6 下林繁夫「熊本県下における古代礎石と古瓦」『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』第3冊 1926

付記1 この項の記載については、熊本市立博物館・富田統一氏の教示によるところが多い。

付記2 脱稿後、岡田遺跡（仮称）で縄文時代早期の押型文土器を数点採集した。

II 調査の経過

1 調査に至る経過

昭和58年10月、県農政部耕地第一課から文化課に対して、昭和59・60年度の農業基盤整備事業実施計画の協議があった。これを受け文化課は、遺跡地図との照合や現地踏査を行ない、施工地区に含まれる文化財の把握に務めた。

県営畑総事業うてな台地地区については、県指定史跡・袈裟尾高塚古墳の周辺での施工計画が呈示され、遺跡地図と照合の結果、昭和59年度施工予定地に袈裟尾丸山古墳・袈裟尾茶臼塚古墳が含まれていることが判明した。遺跡地図に未登録の遺跡の探索と、上記の二古墳の現状を確認するための現地踏査を昭和59年3月26~29日に松本健郎・古森政次が行なった。現地踏査の結果、昭和59年度施工予定地に袈裟尾丸山古墳・袈裟尾茶臼塚古墳が含まれること、昭和60年度施工予定地の中に遺跡地図に未登録の遺跡が二箇所に存在すること（後に試掘調査の結果、西村上遺跡、竹の上原遺跡と命名、昭和60年度に発掘調査を実施）が確認されたので、県農政部耕地第一課長あてに結果を報告した。

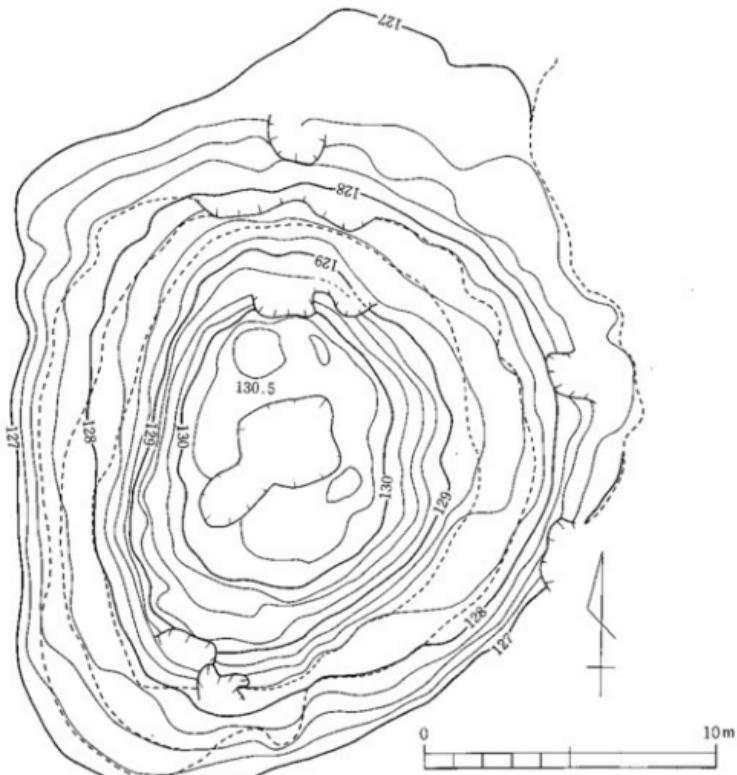
以上の経過を経て、当面の問題として昭和59年度施工予定地に含まれる袈裟尾丸山古墳・袈裟尾茶臼塚古墳について文化課・県耕地第一課・県菊池事務所耕地課・菊池市耕地課・菊池市教育委員会で協議（以下、五者協議と称する）を重ねた。協議の過程で農政部局から、袈裟尾茶臼塚古墳については昭和60年度施工予定に変更すること、袈裟尾丸山古墳については、発掘調査を実施したうえで撤去したいとの意向が示された。文化財部局からは現地での保存を提案したが、結論を得るには至らなかった。

前章で述べたとおり、袈裟尾丸山古墳についての資料は皆無で、保存の論議に説得性を欠いていた点は否めない。協議の結果、袈裟尾丸山古墳については墳丘の測量、内部主体の確認調査を主眼とする試掘調査を実施し、その結果をもとに改めて協議を進めることになった。

2 試掘調査と保存協議

袈裟尾丸山古墳の基礎的な資料を整え、保存問題の協議資料を得るために試掘調査を、昭和59年5月14日から6月1日にかけて（実働13日間）実施した。

試掘調査の内容は、①下草の伐採、②墳丘の測量、③主体部の構造及び遺存状態の確認であった。調査は古森政次が中心となり、坂田和弘、渡辺（現姓吉田）正一が助成し、必要に応じて松本健郎が参加した。



第3図 製塙尾丸山古墳墳丘測量図（調査前）

調査前の古墳は、櫻などの雑木の間に下草が繁茂し、容易には立ち入りが出来ないような状態であった。下草や雑木を伐採すると、古墳の外形が観察出来るようになった。この時点では、古墳の墳丘及びその周辺部は開墾などによって三段築成状になっており、明瞭な墳裾の確認は困難であった。時間的な制約もあり、墳丘部を中心とする $1/100,25\text{cm}$ カンターの測量図を作成した（第3図）。現地での観察や測量図の検討から、墳丘は直径15~20mの円墳と考えられた。墳丘の特色として、盛土はほとんど行っておらず、基盤である阿蘇溶結凝灰岩を削り出して造られていることが判明した。

墳頂部の平坦面には比較的大きな窪みがあり、石材が散乱しているなど、主体部が盜掘を受けていることは明白であった。盜掘坑の部分に試掘坑を設け主体部の確認を行ったが、予想以上に盜掘などによる擾乱が著しく、主体部は壊滅状態であることが判明した。主体部の石材は

ほとんど残っておらず、掘方の部分も掘り崩されていたが、僅かに残っていた掘方や石材などから見て、主体部は小型の竪穴式石室と推定された。

主体部の試掘坑から管玉、水晶玉、刀子、須恵器、土師器、砥石、寛永通宝などの遺物（第8図）が出土したが、いずれも盜掘坑の部分から出土したもので、原位置を止めているものはなかった。

以上の成果をとりまとめ、文化課で内部検討を行い、高塚・丸山・茶臼塚の三古墳がそろった古墳群に歴史的な意義があるとの考え方から、昭和59年6月19日、文化財保護の立場から現地保存を前提とした整備事業の設計変更の検討を県耕地第一課長、県菊池事務所長に依頼した。同時に、この通知の写しを菊池市長、菊池市教育長あてに発送し協力を依頼した。

これに対して、昭和59年7月20日付け、県菊池事務所長から熊本県教育長あてに回答及び要望が出された。その要旨は、袈裟尾丸山古墳が計画地域の真中にあり、日照その他について周辺農地に悪影響を及ぼすこと、古墳の位置する丘陵を削平して周辺の谷間を埋め立てることにより、農地の全体的な形状が良くなり、整備事業の高い効果が得られること、古墳の部分を除外して周辺部を整備した場合、古墳と農地との段差が大きくなり、防災上難点があること、農地として有効利用することに対する地元の強い要望があることなどにより、発掘調査を実施したうえで古墳を撤去したいというものであった。この文書には、地元の要望を集約した菊池市長職務代理者（菊池市助役）の意見書が添付されていた。

以上の経緯の後、五者協議を開き、問題の解決について協議を重ねた。最終的には袈裟尾丸山古墳については発掘調査を行ったうえで撤去する、袈裟尾茶臼塚古墳については施工地区から除外して現状で保存することになった。

3 調査経過

袈裟尾丸山古墳の発掘調査は、昭和59年9月20日から11月22日までの2ヶ月間実施した。調査には古森政次・坂田和弘が専任し、松本健郎・渡辺（現姓吉田）正一・西村美津恵が助成した。調査費用は、農家負担相当分を文化課が国庫補助を受けて負担し、他は農政部局から令達を受けた。

〈調査日誌抄〉

- 9月20日　　試掘調査の時残しておいた立木の伐採を開始。
- 9月28日　　墳丘に十字にトレンチを設定して発掘を始める。試掘調査で予測したとおり、墳丘は地山を削り出して築造されている。
- 10月4日　　墳丘を四分割し、1区ずつ表土剥ぎを行う。立木の抜根に時間を要し、作業が進まない。
- 10月18日　　墳頂部の主体部及び擾乱坑の発掘を開始。並行して墳丘部の抜根、表土剥ぎを続ける。
- 10月25日　　主体部の埋土の土ふるいを開始。
- 11月1日　　主体部の実測を開始。主体部は完全に破壊されており、掘方のごく一部が残っているにすぎない。
- 11月12日　　トラバースを組み、1/100の全体測量を開始。測量には約10日間を費やした。
- 11月22日　　気球による空中写真の撮影。本日をもって総ての調査作業を終了した。

現地調査終了後、遺物・図面などの整理を行ったが、調査担当者が他の調査にも従事しなければならず、昭和59年度中には整理作業が完了しなかった。

残りの整理作業及び調査報告書の発行は、昭和61年度事業として実施することとした。中心となって調査を担当した古森政次・坂田和弘の両名は、昭和60年4月1日に文化課から学校に転出したため、調査資料などは松本健郎が引継を受け、両氏の指導・助言のもとにその任に当った。重要な事実関係の記載である墳丘・内部主体については、両氏に執筆を依頼した。また、袈裟尾茶臼塚古墳については、同古墳の調査を担当された富田紘一氏に執筆を依頼した。遺物の実測や挿図の作成には、瀬丸延子・本田まゆみ・六田育子の協力があった。

4 調査の組織

昭和59年度・昭和61年度の調査組織は、次のとおりである。

昭和59年度 【現地調査】

調査責任者	米村嘉人（文化課長）	森 一則（文化課長）
	林田茂一（文化課長補佐）	佐々木正典（文化課長補佐）
	隈 昭志（文化課主幹〔文化財調査係長〕）	
調査担当者	古森政次・松本健郎（文化課技師）	坂田和弘（文化課嘱託）
	渡辺（現姓吉田）正一・西村美津恵（文化課臨時職員）	
調査総務	大塚正信・柴田和馬（文化課主幹〔経理係長〕）	
	花田隆二（文化課参事）	谷 喜美子（文化課主事）

昭和61年度 【報告書作成】

調査責任者	丸木保賢（文化課長）	林田敏嗣（文化課長補佐）
	隈 昭志（文化課長補佐〔文化財調査係長〕）	
整理担当者	松本健郎（文化課文化財保護主事）	
	瀬丸延子・本田まゆみ・六田育子（文化課臨時職員）	
原稿分担執筆	富田紘一（熊本市立博物館学芸員）	古森政次（白水村立白水小学校教諭）
	坂田和弘（菊陽町立武藏ヶ丘中学校教諭）	
調査総務	柴田和馬（文化課主幹〔経理係長〕）	森 貴志（文化課参事）
	谷 喜美子（文化課主任主事）	

調査協力者 【昭和59・61年度】

県農政部耕地第一課	県菊池事務所耕地課・菊池台地土地改良推進室	菊池市耕地課
菊池市教育委員会	熊本市立博物館	文化財保存計画協会
植島悌四郎	坂本絆昌	上妻信寛
矢野和之	勢田広行	田中義和
		高木恭二
		木下洋介

III 裂縫尾丸山古墳の調査

1 古墳の立地（第4図）

裂縫尾丸山古墳の位置と立地の概要については、既に第Ⅰ章で述べたところであるが、ここでは古墳群の位置関係と古墳立地の微地形について記述する。

既に述べたとおり、裂縫尾古墳群は台地の北東部にある。この付近は、台地の中では最も高くなっている、菊鹿平野の眺望に勝れている。裂縫尾の集落の北側から南北に一つの尾根筋が伸びているが、古墳群はこの尾根筋から西に派生した小さな丘陵の上に位置している。狭い谷を挟んで二つの丘陵が並んでおり、北側の丘陵の先端部に丸山古墳、南側の丘陵の基部に高塚古墳、同じ丘陵の先端部に茶臼塚古墳が立地している。

三つの古墳の位置関係は、高塚古墳の西北西約120mに茶臼塚古墳が、同じく北西約200mに丸山古墳が位置する。丸山古墳と茶臼塚古墳は、幅60~70mの谷を隔ててほぼ南北に相対しており、両古墳間の距離は約120mである（古墳間の距離は墳頂部で計測）。

丸山古墳の位置する北側の丘陵は、西に僅かに張りだした後に鞍部があり、鞍部では幅も狭くなっている。古墳のある先端部は再び高くなり、古墳の部分は独立丘陵状になっている。古墳の周辺部は、耕地化などによりある程度地形を改変されているが、古墳築造時との基本的な変化はないものと考えられる。この丘陵は、南側の丘陵よりも僅かに低く、丸山古墳からの眺望は南側の丘陵に遮られ、菊鹿平野の全体を見下ろすことは出来ない。

この丘陵の地質基盤は阿蘇溶結凝灰岩であり、丘陵縁辺部の崖面のあちこちに露出している。表層ではやや軟弱で、人頭大の軽石が多く見られ、古墳の墳丘でも園芸（盆栽）用などに採掘した跡が各所に見られた。下層部は溶結度の強い層になっている。

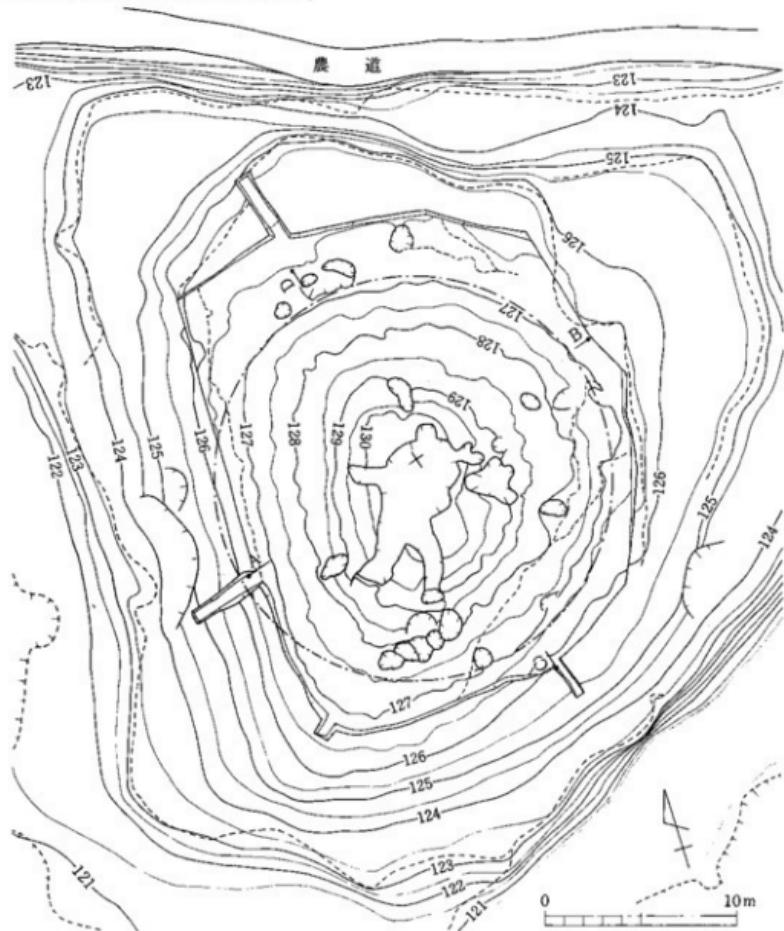
高塚古墳・茶臼塚古墳の位置する南側の丘陵は、高塚古墳の西側までは比較的平坦であるが、西側の茶臼塚古墳に向かって緩やかに傾斜している。3基の古墳の中では、高塚古墳が最も高い位置にあり、墳丘基底面で標高134m、復原後の墳頂部は139.2mとなっている。茶臼塚古墳の墳丘は壊滅状態であるが、墳丘基底面は標高126m前後にあったと推定される。丸山古墳は、標高127mに基底面があり、墳頂部は130m余りである。



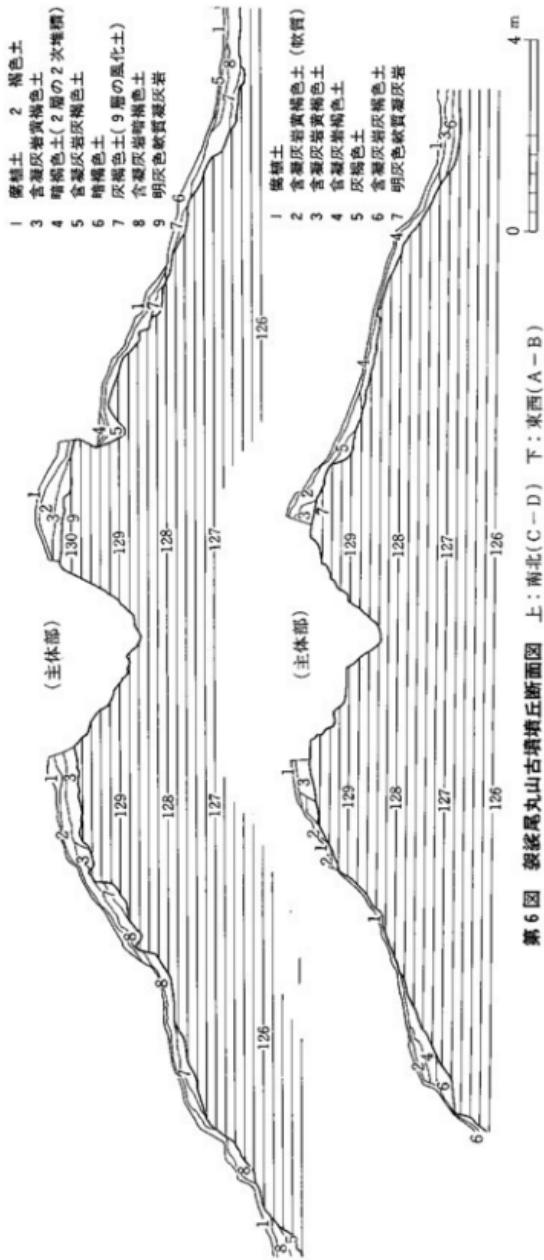
第4図 裸姿尾古墳群地形図

2 墳丘（第3・5・6図）

袈裟尾丸山古墳の墳形は円墳であるが、後世の改変によりかなり変形を受けていた。調査時には、椎などの灌木類や竹などがあり、木々の間にはカンネカズラ等が繁茂していた。古墳の一帯は戦中・戦後に開墾して耕地化され、畠地として利用されていたようで、三段築成状に平坦面が残っていた。調査時には現存していなかったが、墳頂部には小さな祠があり、土地の所有者などがよく参拝していたという。



第5図 袈裟尾丸山古墳墳丘測量図（調査後）



第6図 製塙尾丸山古墳堆丘断面図 上：南北(C-D) 下：東西(A-B)

古墳の立地する丘陵は、東から西に延びている。東側は鞍部となり、幅も狭くなっているが、先端部になるにしたがって幅が広くなる。丘陵の北側と南側には丘陵に沿って農道が造られている。農道開削の時、丘陵の側端部を削っているので、農道に面する北側と南側はかなり急な崖になっている。丘陵の西側、先端部は開墾のため段差がつけられ、直線的になっているが、本来は丸味のある地形であったと考えられる。

墳頂部は、南北約8m、東西約6mの平坦面があったが、中央部は盜掘などによって浅い窪みができていた。

墳丘の調査は、主体部の推定長軸及びその直交軸（概ね東西・南北方向）にトレンチを設け、その断面観察によって墳丘の築成状態を探すことから始めた。断面図（第6図）に示したとおり、基本的な墳丘構築は、丘陵を削り出して築成している。前にも記したとおり、丘陵の基盤地質は溶結度の低い軟質の凝灰岩である。墳丘盛土はほとんどみられず、墳頂部を中心として部分的にみられたにすぎない。

トレンチでの観察の後、墳丘を4分割して調査を進めたが、トレンチ部分で観察されたのと同様な状態であった。墳丘盛土と判断されたのは含凝灰岩黄褐色土で、全体的には少ないが、南東区と南西区、及び墳頂部に比較的多く観察された。墳丘部分からの出土遺物もこの2区画に多かったが、近世以降の遺物と混在しており、原位置のものではない。

墳丘部は、基盤である凝灰岩に達するまで掘削したが、樹根、カンネ・山芋の採取、軽石の採掘などにより随所に窪みがあった。墳丘の改変はほぼ全面におよんでいたが、北東区は比較的残存度が良く、墳裾部を確認することが出来た。南東区においても断続的にではあるが裾部が認められた。北西区・南西区においては裾部は確認できなかった。確認された墳裾部は、概ね現状の中位の平坦面に相当する。この遺存部分から墳丘規模を推定すると、直径は約20mとなる。

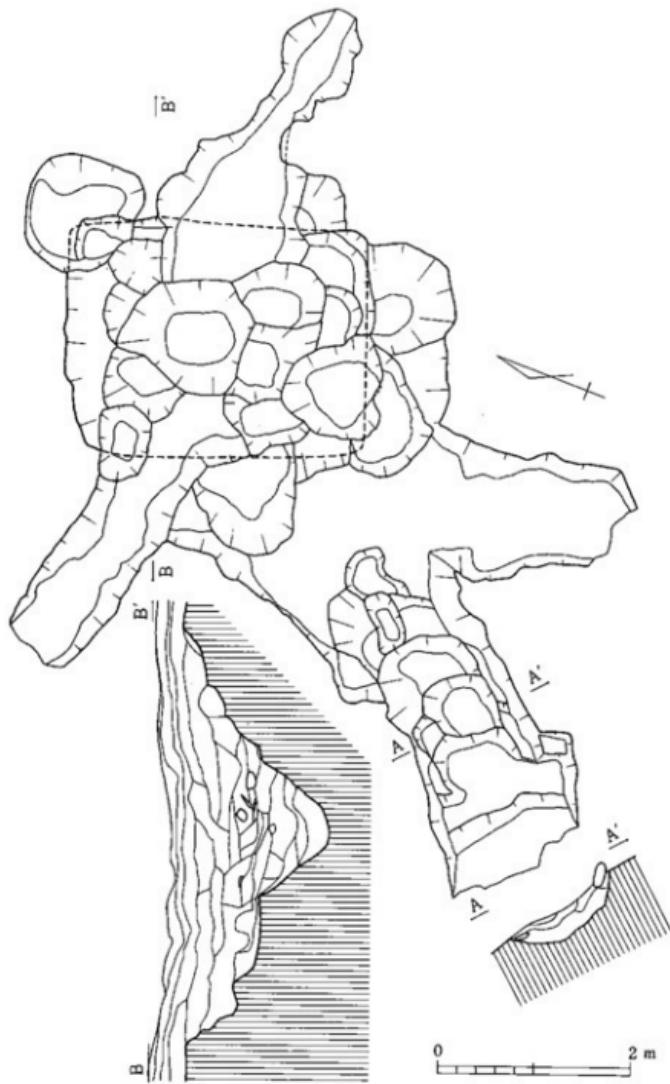
墳丘裾部の標高はほぼ127mで、墳頂部の最高所は130.40mである。墳頂部もある程度の削平を受けているので、墳丘の正確な高さは不明であるが、3m50cmを超えるものの4mには満たないものと推定される。

埴輪や葺石などの外部施設はなく、周溝もなかった。

3 内部主体（第7図）

先述したとおり、墳頂部には平坦面があり、浅い窪みがみられ、石室の石材とみられるものがあった。試掘調査の時、主体部の一部を発掘したが、擾乱が著しく壊滅状態であったが、小型の竪穴式石室と推定された。

発掘調査では主体部を全掘したが、盜掘などによる擾乱は予想以上に激しく、石室は完全に



第7図 装綾尾丸山古墳主体部実測図

破壊され、掘方の一部が僅かに残っているにすぎなかった。

掘方は、北側の一辺と南東の隅が遺存していたにすぎない。この遺存部から推定すると、掘方の本来の規模は幅2.4m、長さ3.1m前後と推定される。攪乱が進み、掘方の下底面は確認できなかったが、盜掘坑の状態などからみて、1m前後と推定される。北側の部分でみると、掘り込みの角度は約60度である。

主体部は完全に破壊されていたが、主体部の攪乱部分及び墳丘部から石材が検出された。これらの石材は、人頭大の河原石と、凝灰岩の割石の2種類があり、僅かに赤色顔料が付着しているものもあった。凝灰岩は、この地方で稗方石と呼ばれるもので、硬質で灰褐色を呈する。古墳の周辺部では、北側の堀切、南側の袈裟尾・山崎付近にも凝灰岩の露頭があるが、石質が僅かに異なっており、古墳の北東にある稗方の石材を使用していることが判明した。具体的な採掘地点は特定できないが、古墳からの距離は直線にして1,500m前後である。この一帯（稗方）では最近まで凝灰岩の採掘が行われていた。現在は採掘されていないが、採掘跡は何箇所か残っている。河原石は、台地の南の追間川から採取したものであろう。

出土した石材からみて、主体部は石棺や木棺ではなく、石室であることは疑いない。原位置をとどめた石材は皆無で、石室の詳細な構造は不明であるが、掘方の状態からみて横穴式ではなく、竪穴式と考えられる。掘方の西南に、階段状に段の付いた遺構が確認された。一時、この遺構が古墳に伴うもので、主体部の墓道かとも考えたが、後述するように後世のものであることが確認された。

石室の規模は全く不明であるが、掘方の規模及び掘り込みの角度から考えて、幅1m、長さ2m前後と推定される。高さも1mを超えないものであろう。出土した石材の中に、長さ1m、幅40cm、厚さ30cmほどの凝灰岩が1点あったが、天井石と考えられる。

盜掘坑及び墳丘部から、1~3cmの小礫が数十点出土しており、床は礫床であった可能性が高い。

古墳の主体部は、盜掘以外にも大きな攪乱を受けていた。主体部を東西に横断する溝、西南に延びた階段状遺構、南に延びた溝などである。東西に延びた溝は、側壁がオーバハンジングしており、トンネル状に掘られていたとみられる。掘削の時期等は不明であるが、墳丘盛土を切込んで掘られており、後世のものである。階段状遺構の中から古墳時代の遺物が出土したので、一時、古墳の付帯遺構かと考えたが、墳頂部を覆っている盛土を切っており、埋土の中から近世の土師器の小皿（糸切り底）が検出され、近世以降のものであることが判明した。かつて、墳頂部に祠が祭ってあり、信仰の対象になっていたようであるので、その参道的なものであろう。

4 出土遺物

主体部が盗掘を受けていることもあって出土遺物は少なく、原位置を止めているものは皆無であった。

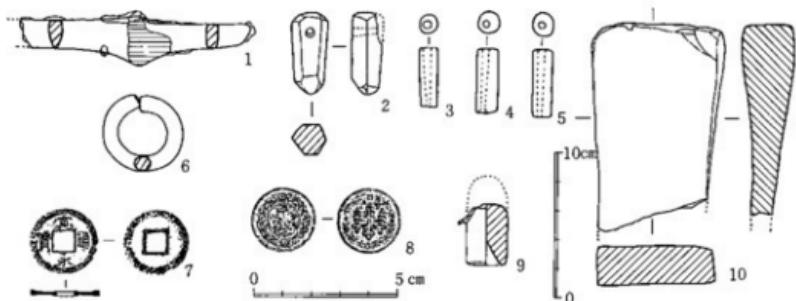
調査の別で分けると、試掘調査で出土したものと発掘調査で出土したものがある。試掘調査で出土したもののほとんどは、主体部の搅乱部分から出土したものであり、発掘調査で出土したものは墳丘の搅乱部分から出土したものである。

(1) 試掘調査の出土遺物（第8・9図）

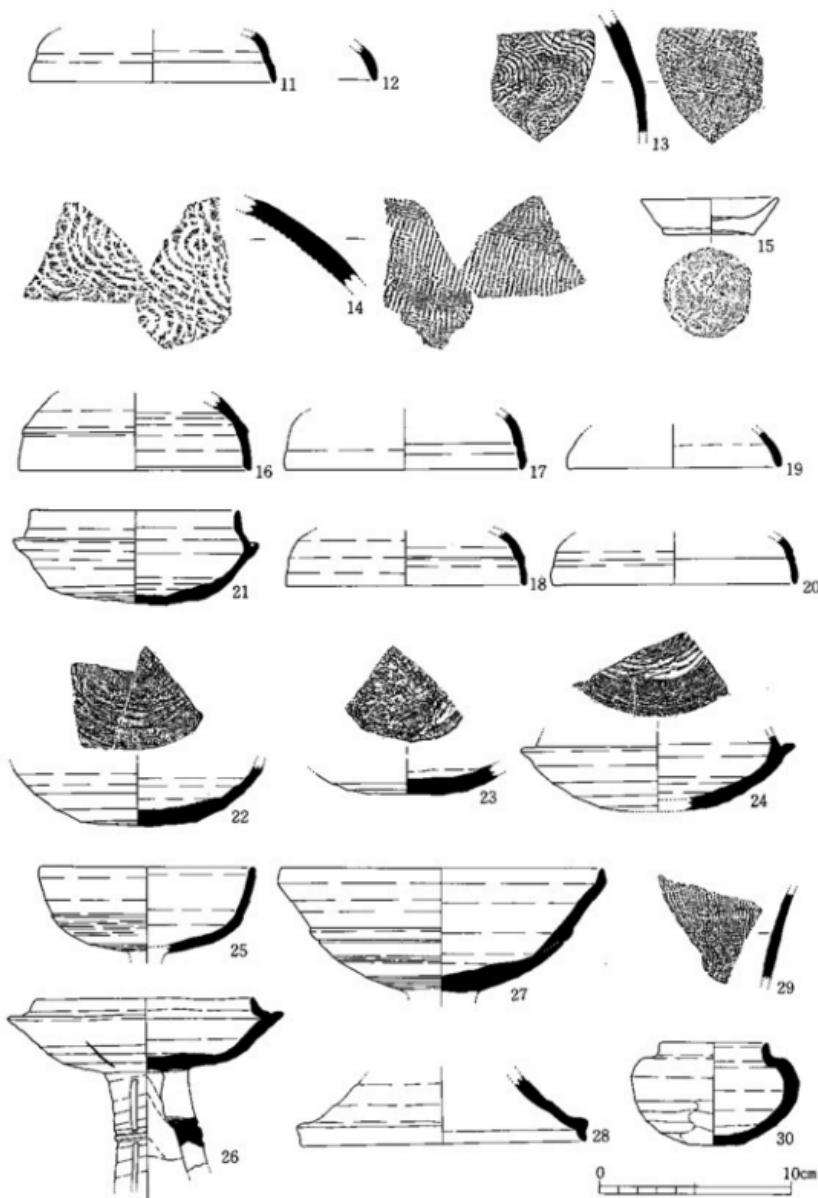
主体部の搅乱部分から出土したものである。前に述べているとおり、主体部は幾度となく盜掘・搅乱を受けており、原位置を止めているものはなかった。出土した遺物は、本来古墳に伴なっていたものと、後世の盜掘・搅乱の時に混入したものとがある。

古墳に伴なう遺物には須恵器、刀子、玉類がある。須恵器は杯蓋3点、カメ2点が出土した。杯蓋のうち1点は墳頂部から採集したものであるが、図示した2点（11・12）は主体部の搅乱部分から出土したものである。この2点には形態差がみられ、時期的にも多少差があるが、6世紀後半～終末の範囲に収まるものである。カメは胸部の破片（13・14）で、内面の叩き目に相違があり、時期差がある。13の内面は、細目の叩き目の上をナデ調整している。器壁は薄く、堅緻な焼成で、6世紀中葉以前の時期であろう。14の内面は粗い叩き目で、13より新しいものである。

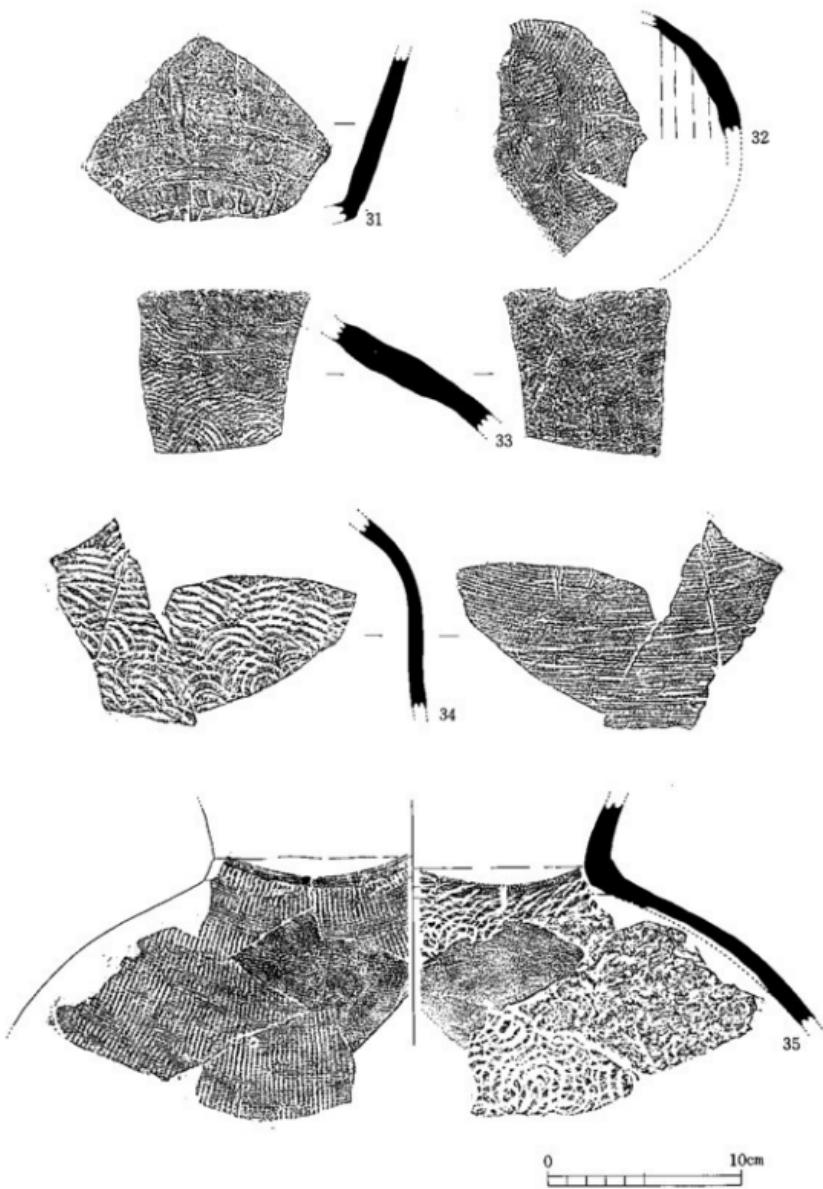
刀子（1）は切先部分を欠いているが、遺存部分の長さは約8cmである。茎の先端は丸みをおび、茎の間に近い部分には木質が付着している。刀部は研ぎ減りが著しく、闊の部分での幅は1.8cmであるが、折損部では1.1cmほどである。玉類は2点出土した。2は水晶の原石に穿孔したもので、長さは2.9cmを測る。水晶特有の六面体を呈し、基部を研磨し、片側から穿孔したものである。3は碧玉の管玉で、長さ2cm、直径6mm前後を測る。片側からの穿孔で、碧玉



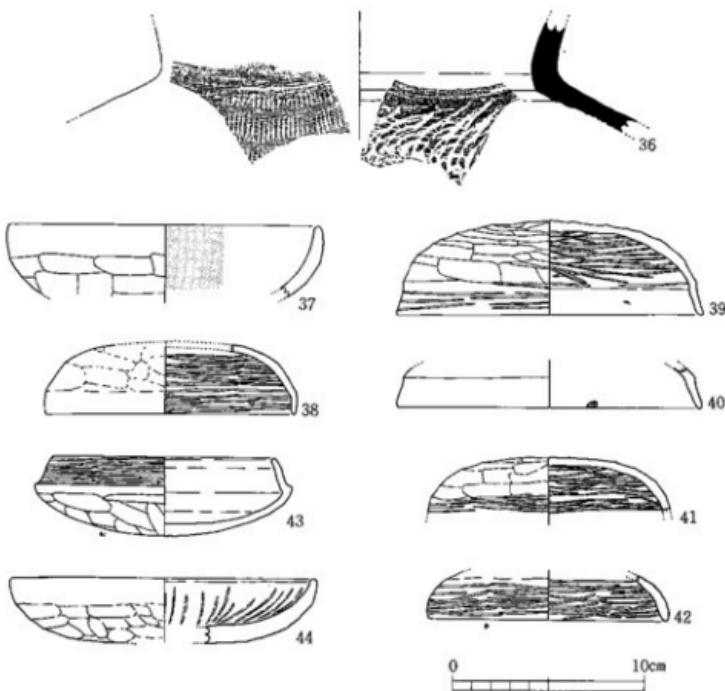
第8図 裴尾丸山古墳出土遺物実測図



第9図 装塚尾丸山古墳出土遺物実測図



第10図 裸尾丸山古墳出土遺物実測図



第11図 裴婆尾丸山古墳出土遺物実測図

特有の濃緑色を呈する。

後世の混入遺物には土師器、陶器、寛永通宝、砥石、移植ゴテがある。土師器（15）は糸切り底の小皿で、底径4.8cm、器高1.8cm、復原口径7.2cmを測る。底部は突出ぎみで、底部の器壁は厚い。器形や法量からみて近世のものと考えられる。細片を含めて4点が出土している。陶器は茶碗などの小型品の小破片で、明治時代以降のものである。

寛永通宝（7）は1点の出土であるが、直径2.4cm、輪の幅2mm、郭があり、孔は一辺7mmの方形である。書体は細字の楷書で、背文はない。書体などの特徴から、寛文年間以降の新寛永とみられる。砥石（10）は乳白色の天草砥石と呼ばれるもので、折損している。遺存部の最大幅は9cm、長さ14cmを測り、すべての面に使用痕がみられる。特に広口面の使用が顕著で、端部の厚さが3.5cmに対して、折損部での厚さは1.5cmにすぎない。

移植ゴテは金属部分に光沢が残っており、数年以内に混入したものと考えられる。この古墳の盗掘を生々しく示すものである。

その他、黒曜石の小破片と木炭がごく微量出土している。

(2) 発掘調査の出土遺物（第8～11図）

発掘調査で出土した遺物は、すべて墳丘部から出土したものである。墳丘の盛土築成がないこと、周溝がないことに加えて墳丘部分も著しく擾乱を受けていたことなどにより、遺物の量は多くなく、ほとんどが破片の状態で出土した。出土した遺物は、①古墳時代以前のもの、②古墳に伴うもの、③後世に混入したものに大別されるが、量的には③が最も多く、①は数点にすぎない。

①古墳時代以前の遺物

黒曜石の剝片と弥生式土器の細片が各2～3点出土している。

②古墳時代の遺物

古墳に伴う遺物、及びその可能性が強い遺物には須恵器、土師器、玉類、耳環、鉄率がある。量的には須恵器、土師器の順に多く、玉類は管玉が2点、耳環・鉄率は各1点の出土である。須恵器、土師器は破碎し、散乱した状態であった。ある程度は接合することが出来たが、完形になるものはない。

須恵器の器種には蓋杯、高杯、カメ、馳、壺、横瓶、壺がある。あまり大きな破片ではなく、すべて擾乱状態であったため個体数の把握は困難であるが、蓋杯・カメ以外は少量の出土である。蓋杯は10個体前後、カメは叩き目の種類などから5個体ほどと推定される。

蓋杯（16～24）は3種のものがあり、約1世紀の幅がある。蓋16は身21と対応し、蓋17・18・20は身22～24に対応する。22～24の内底面には、叩きの圧痕がある。19は最も新しい形態であるが、これに対応する身は細片がわずかに出土している。

高杯には無蓋（25）と有蓋（26）のものがある。26は、焼ひずみが著しい。27・28は同一個体で、杯部は特徴的な形態である。赤褐色を呈し、所謂「赤焼須恵器」と呼ばれるものである。

馳（29）、壺（30）は1点ずつの出土である。馳は頸部の小破片で、全体の形は不明である。

31は詳しい器形が判然としない。壺の底部の可能性が強いが、カーブがやや不自然で、革袋形になる可能性もある。

カメ（33～36）はほとんど胴部の破片で、口縁部の破片はない。35・36は同一個体の可能性が強い。

土師器は器種が少なく、壺・蓋杯がある。壺（37）は小さな破片であるが、内面には赤色顔料が塗布されている。土師器の中では、古い年代の遺物である。38～42は、須恵器を模倣した蓋杯で、多少形態差がある。内外面ともヘラ磨きが加えられているものが多い。40の口縁部内面には、糊の圧痕がある。

玉類は管玉（4・5）が2点ある。試掘で出土したもの（3）より僅かに大きい。材質はいずれも碧玉で、片側からの穿孔である。耳環（6）は表面の劣化が著しく、金・銀の判別はで

きない。

鉄宰（図版10-45）は、大きさ2.5cm、重量14.9gの小塊である。古墳に伴うのかどうか、断定は出来ないが、形狀からみると鍛冶率と考えられる。

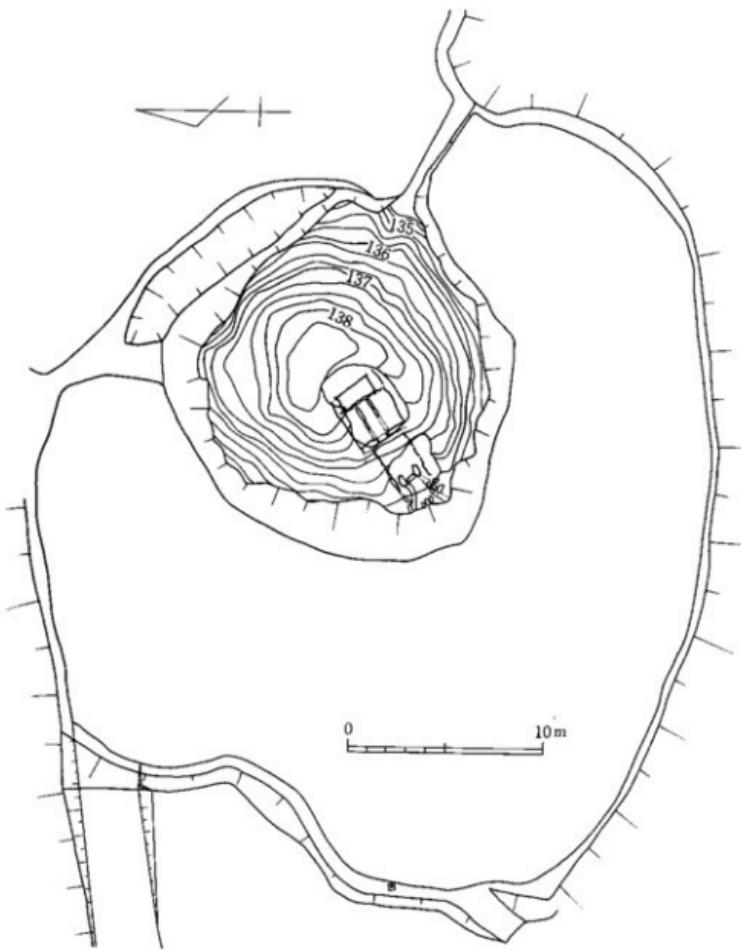
③後世の混入遺物

種々雑多なものがあり、量的にも多い。大正7年の1銭銅貨（8）、西南戦争時の銃弾（9）、ガラス類（ビー玉・薬瓶等）、瓦、陶磁器、金属器などがある。

IV 裂縫尾古墳群の概要

1 裂縫尾高塚古墳

(1) 墓丘 (第12図)



第12図 裂縫尾高塚古墳墳丘測量図(案「裂縫尾高塚古墳保存修理工事報告書」)

袈裟尾高塚古墳の墳丘は、盜掘や開墾、自然流出などによって大幅に変形していた。昭和53年度に行われた調査時点では、見かけ上は直径約17m、高さ5.2mであったが、これは周辺部の地下げによって生じた数値で、墳丘のトレンチ調査及び測量図の検討によれば、石室主軸方向直径15.23m、主軸に直交する直径15.12m、高さ3.34mという数値（現存値）が得られている。すなわち、墳丘の周囲は約2mの地下げが行われたことになる。この調査の時点では、周囲の削平などにより、墳裾部・周溝は遺存しておらず、墳丘の原形や規模は確認されていない。残丘の北東にある周溝状の窪みは、後世の擾乱などによるものであることが確認されている。墳丘は、基盤地層である阿蘇溶結凝灰岩層の上に築かれており、封土は版築が行われている。^{註1}

昭和5年に作成された坂本経堯氏の調査資料によれば、墳丘の周りには周溝が描かれており、墳丘規模は「東西九間、南北十間、溝幅二間、高サ畠地ヨリ二間」と記載されている。「袈裟尾高塚平面及断面図」を見ると、周溝は東側・西側では良く残っているが、北側・南側では幅が狭くなっている。高塚古墳のより原形に近い姿やその後の変貌を知るうえで絶好の資料である。

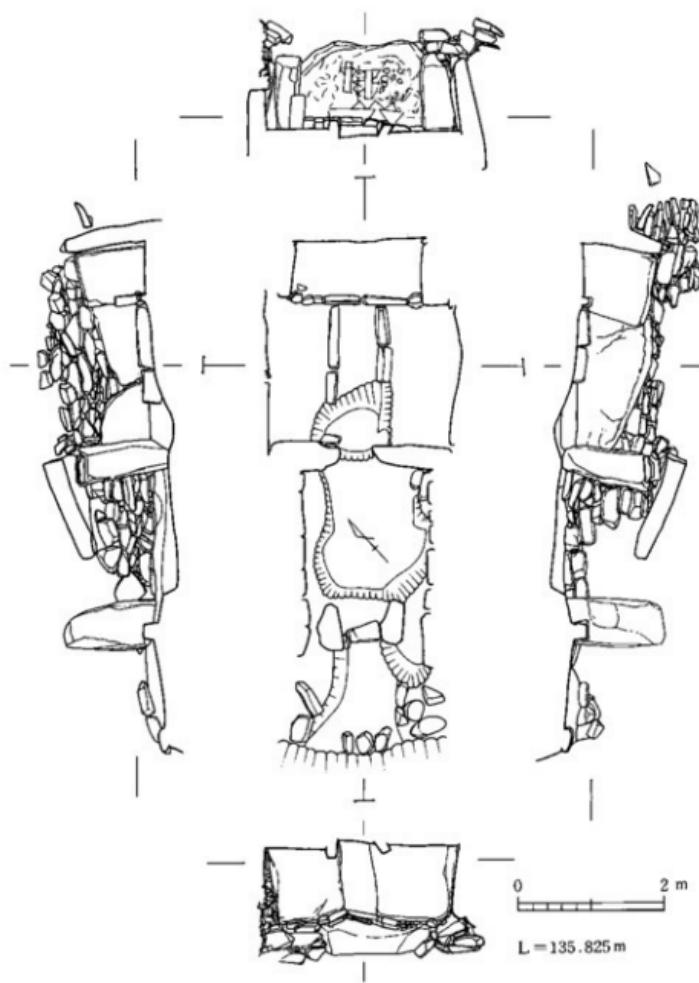
これらの資料を総合すると、高塚古墳は周溝を有し、直径が20mを超える円墳であったとみられる。

保存修理事業では、石室の構造上有効な土圧及び土圧のバランスを得る形状・規模、外気温湿度の影響を受けない封土を石室・保存施設上に確保することに重点をおき、直径24.55m、墳頂部直径5.5m、高さ4.7m（墳丘傾斜角25度）に復原されている。

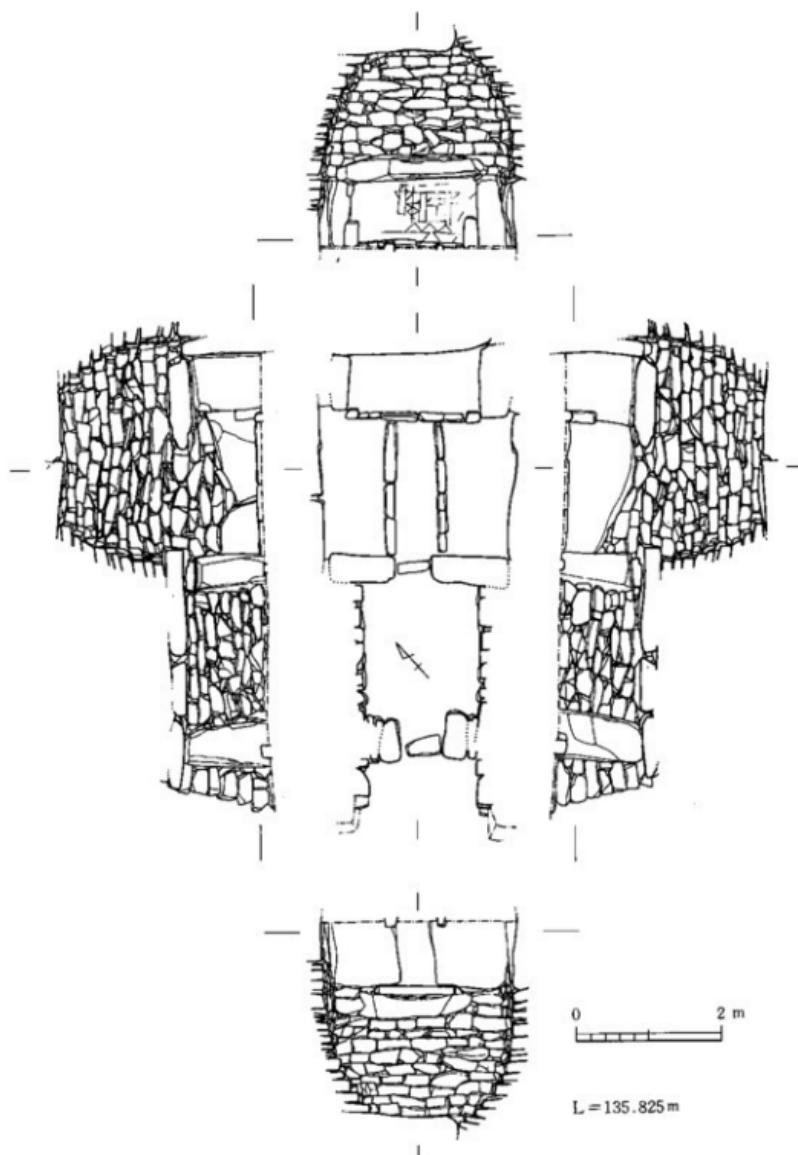
（2）内部主体（第13・14図）

高塚古墳の主体部は、ほぼ南西に開口する複室構造の横穴式石室である。古くから開口しており、墳丘部と同様に破壊が進んでいた。第13図は、昭和53年度調査の石室実測図である。羨道部はほとんど崩壊し、前面は地下げによって削り取られているため詳細は不明であるが、残存する部分などから幅1.6m前後、僅かに前面が広くなるものと推定されている。羨道部の前面には、閉塞石と思われる河原石が數点検出されたと報告されているが、坂本氏の石室実測図には羨門の外側に板石の閉塞石が描かれており、これらの河原石は閉塞石の根元めかとも見られる。羨門袖石は側壁とは遊離して、石室主軸と平行に立てられており、袖石の立て方に特色がある。

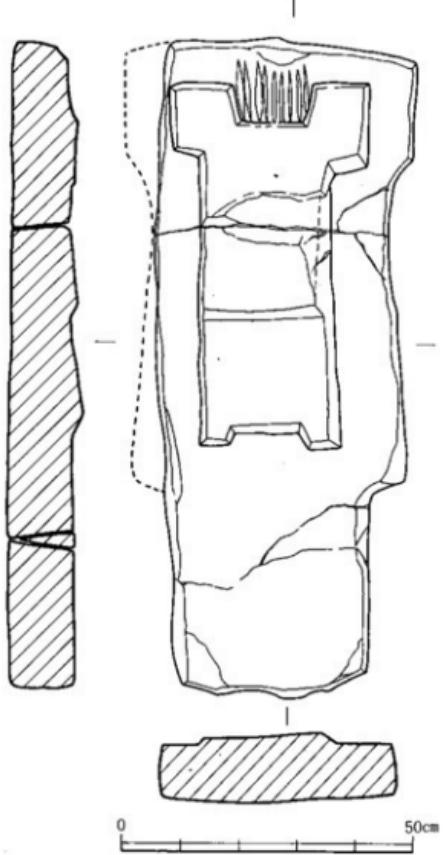
前室は、幅1.8m、奥行2.2mの長方形プランである。側壁には腰石を用いず、凝灰岩の自然石や割石を小口積みにしている。側壁の上部は残っておらず、天井石も玄門側は位置が少しずれて残っていたが、他に2枚の天井石が室内に落ち込んでいた。側壁は左右とも約70度の傾斜で持ち送りながら積まれているが、直線的であり、横断面形は台形を呈する。床面は擾乱が著しく、特別の施設は確認されていない。玄門袖石は凝灰岩の巨石を立てており、玄門部の幅は



第13図 製接尾高塚古墳石室実測図(拠「製接尾高塚古墳保存修理工事報告書」)



第14図 装塗尾高塚古墳石室復原実測図(拠「装塗尾高塚古墳保存修理工事報告書」)



第15図 石製品実測図

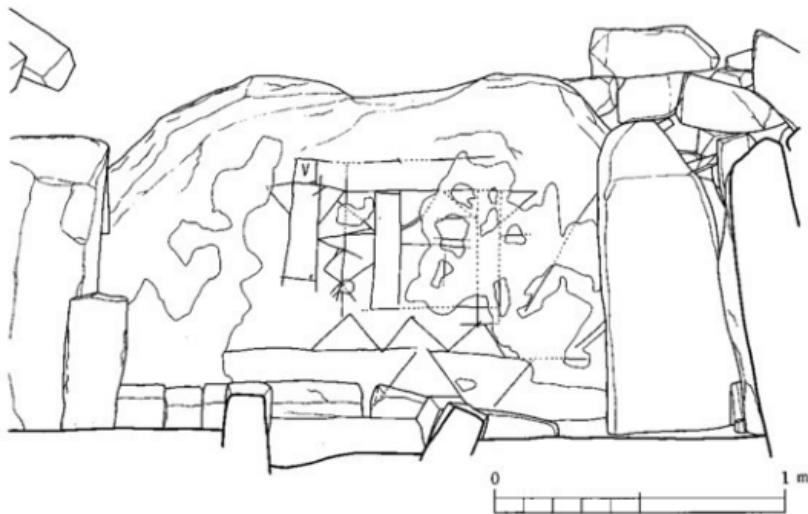
(掲『装飾尾高塚古墳保存修理工事報告書』)

約45cmである。特筆すべきことは、^{木造}櫛石として使用されていた石材に、^{浮彫}の浮彫が発見されたことである。この石材(第15図)は凝灰岩で、圧力によって大きく三つに割れていたが、復原すると長さ(高さ)約1.1m、幅32~41cm、厚さ10cm強の大きさである。片面に櫛の浮彫があり、赤色顔料が塗布されている。櫛は最大幅約34cm、高さ約65cmを測る。従来、この石材は見ることができたが、浮彫の面が上になっていたため、解体修理によって始めて浮彫が施されていることが判明したものである。

玄室は幅2.7m前後、奥行約2.9mの長方形プランで、奥壁に沿って石屋形を設置しており、その前面は仕切石によって3区に区分されている。側壁の下部に

は巨石の腰石を立て、その上に自然石・割石を小口積みに積みあげている。小口積みの部分は、2~5段の石積みが残っていたにすぎず、上部の詳細な構造、高さなどは不明であるが、持ち送りによって穹窿形の構造であったと推定される。保存修理工事では、他の古墳との比較検討などによって高さ2.8mに復原されている(第14図)。

石屋形は、玄室の幅いっぱいに組まれており、左右の側壁との間にはほとんど間隙がない。石屋形の奥壁は、玄室の奥壁腰石を共用している。この奥壁に、後述するような装飾文が施されている。石屋形の前面には角柱状の石を立て、その内側は切石によって框状に仕切っている。天井石は、昭和5年の坂本氏の実測図には描かれているが、昭和53年度の調査時には玄室に落



第16図 装飾尾高塚古墳主体部奥壁装飾文実測図(拠「装飾尾高塚古墳保存修理工事報告書」)

下していた。天井石は安山岩の偏平な自然石で、面取り加工などは行なわれていない。石屋形の内法は幅1.8m、奥行・高さとも95cmである。

前室・玄室・石屋形の床面は、ほぼ全面にわたって擾乱を受けていたが、各所に礫が認められ、坂本氏の昭和5年の図でも礫が描かれており、礫床であったことは間違いない。

石室の全長は、遺存していた部分では約6mであるが、羨道部前面は崩壊しているので、本来の数値はこれを上まわることになる。石室を組込む掘方は、長さ約7.4m、最大幅3.7mである。

(3) 装飾文

玄室奥壁の装飾文は、すでに昭和5年の坂本氏の調査で注目されている。氏の調査記録には装飾文の実測図を掲げ、「紋様ハ奥壁一枚石ニ細線沈刻ス　ニ配スルニ三角形ヲ以テシ素朴ナレ共強キ氣品アリ　全面ニ朱ヲ塗リタルト思ハレ点々残存ス」との所見が記されている。実測図には、平行線と三角形を組合せた韁と三角文が描かれている。とくに注目すべきことは、韁の頭部に小さな三角形を連ねた蟻の表現があることである。

その後、装飾文の解釈は坂本氏の見解が踏襲され、種々の著作に引用されている。昭和51年に発行された『熊本の装飾古墳^{註2}』には、「装飾文様は現在、多年の風化作用により消えかかってはいるが線刻で、韁（矢立て）のような文様を二つ並べ、その周辺に三角文を配置している。

その他、羨門および側壁にも朱・白の彩色装飾があったというが、今はみえない。」とある。

昭和53年度の調査では、「(石屋形) 奥壁は安山岩の板状の自然石であり、平らな表面に線刻による轆(幅29cm、高43cm)を横に並べ(3個と思われるが、うち1個はほとんど欠落している)、その下に連続三角文を横に並べている。さらにその下には、三角形様の斜線がある。その他不明な線もあって、二次的な(後世のいたずら)線を含むかも知れない」、「(玄門の)両袖石の前面(前室方向)には、強く赤色顔料が残る部分があって、特に右袖石には一部白色顔料と思われるものが存在するところから、何らかの彩色壁画が描かれていたものと思われる。

(注:保存施設設置後の観察により、三角文が確認された。)、「(前室) 石材の表面には赤色顔料が残存し、当初は前室全面に朱もししくは丹が塗布されていたものと考えられる。(注:保存施設設置後の観察によれば、左側壁に円文が認められた。)」と報告されている。

県教育委員会が実施した装飾古墳総合調査の報告書においても、「石屋形奥壁に線刻による轆様のもの二つを並べ、その周辺に三角文を配している。その他、羨門及び側壁にも朱・白の彩色があったといわれるが、現在は見えない。」と同様の記述がみられる。

装飾文のある奥壁は、板状の安山岩自然石である。装飾のある面は比較的平滑であるが、文様は細い線刻で、自然の風化作用や後世の傷などによって非常に分かりにくくなっている。今回、取扱や現地での観察など十分な検討が出来なかったが、轆であるのか否かに疑問が残る。装飾文の基本的な構成は、縦と横の平行線で、平行線の間に連続三角文がある。連続三角文は、上部では縦方向に、下部では横方向にある。問題なのは上部の文様で、平行線と三角文の組合せが轆と解釈されるかどうかということである。轆にしては他に例を見ない形であり、大きさも不揃いである。また、下に連続する三角文との境界が不明瞭で、轆だけを独立した文様として認定できるかどうか、再検討の必要があろう。そこで問題となるのは、坂本氏の図に表現されている轆である。現状ではその確認はほとんど出来ないが、轆であるかどうかを決定する鍵となることがあるので、なんとか確認する必要がある。

(4) 出土遺物

出土遺物は、昭和5年・10年の坂本氏の調査、昭和49年の鹿本高校の調査、昭和53年の保存工事に伴う調査においてそれぞれ出土している。調査ごとに列記すると次のとおりである。

(昭和5年坂本経堯氏調査)

金環 1	勾玉破片 1	轆(鉄製) 1	土師器高杯(破損)
鉄鎌 数個	銀張鉄片 2	須恵器蓋杯各1	土師器破片 1
刀装具(鰐口?) 1			

(昭和10年坂本経堯氏再調査)

須恵器胞 1

[昭和49年鹿本高校調査]

ガラス玉 韶 須恵器

[昭和53年保存工事に伴う調査]

金環 1 馬具（鞍金具？） 1 土師器（高杯・杯）

鉄鏡 1 須恵器（蓋杯・高杯・甕・瓶）

昭和5年の坂本経堯氏調査の出土品は、氏の調査記録に副葬品一覧表として掲げられたものである。勾玉については、昭和10年の図には「ヒスイ」と記載されており、硬玉製であったことが知られる。韶は、昭和5・10年の遺物配置図を見ると環状鏡板のものである。銀張鉄片とあるのは、銀装の馬具の破片であろうか。鉄鏡は、配置図に形態の異なるものが描かれている。

昭和10年の実測図のなかで、遺物の配置などについては昭和5年の実測図を転記されたものとみえ、重複しているものが多い。昭和10年の図のなかで、前室に描かれている須恵器の甕は、昭和5年の副葬品一覧表ではなく、昭和10年の図だけに描かれている。昭和10年の再調査の時出土したものと考えられる。

これらの遺物の所在は現在不明であり、詳細については明らかでないが、坂本氏の残された記録資料によってほぼその概要を知ることができる。

昭和49年の調査資料は、県立鹿本高校に所蔵されている。実見する機会がなく、未報告のため詳細は不明である。

昭和53年度の調査資料は、「保存修理工事報告書」に収録され、菊池市教育委員会に保管されている。

註1 文化財保存計画協会編『県史跡・裴姿尾高塚古墳保存修理工事報告書』菊池市教育委員会 1981 所取

註2 松本雅明編『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社 1976

註3 菊川和夫「石室」「県史跡・裴姿尾高塚古墳保存修理工事報告書」菊池市教育委員会 1981

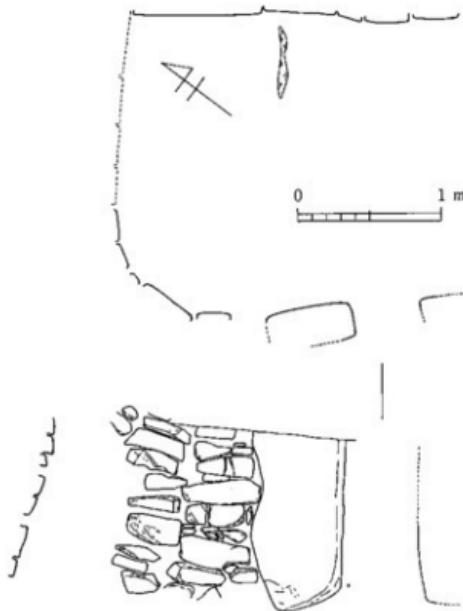
註4 環 昭志「裴姿尾高塚古墳」「熊本県装飾古墳総合調査報告書」熊本県文化財調査報告第68集 1984

2 裂縫尾茶臼塚古墳

(1) 調査にいたる経緯

昭和42年の初秋ころであったが、熊本博物館に古墳出土とみられる管玉や刀子などの遺物が持ち込まれた。これは当時博物館の事務長をしておられた宮本勝哉氏によつてもたらされたもので、氏の実家である鹿本郡菊鹿町（当時菊鹿村）堀切付近の古墳から出土したものであるとのことであった。出土の年代や事情は詳らかではなかったが、まだ一緒に出土したものが近所にあるとのことをお聞きした。そこで一括資料の散逸をふせぐためその収集方を依頼し、何処から出土したかを追跡調査してもらい、この裂縫尾高塚古墳の西側に所在する古墳であることが確認された。そこで、氏の帰省にあわせて古墳を踏査し、その状況の把握につとめた。

古墳は裂縫尾高塚古墳の西にあたる、畠地から雜木林にかかる場所に位置するもので櫟林のなかに存在した。既に大きく破壊されていて、石室もその下部をごく一部のみ残したものであった。墳丘は大きく変形をうけた円墳で直径は約7m、高さが約2m程度が残っていた。石室の石材のほとんどは既に墳丘斜面やその裾に散乱していて、床面の北半では落葉などが堆積していたのみでさして荒れてはいなかつたが南半は埋没していた。



第17図 裂縫尾茶臼塚古墳石室実測図

遺物一括はこの床面から採集されたものということであった。踏査の状況からみると石室はそうとう過去に破壊をうけたものと考えられた。その床面に遺物が多く残っていたことは、破壊が単なる盜掘でなかったのかもしれない。しかし、この件に関してはそれ以上の追跡調査はおこなっていない。

熊本博物館では出土遺物の散逸を防ぐために貰い受け、出土古墳の状況を把握するために石室内の状態を調査することとなった。調査にあつては、該当古墳の名称が聞き取りの情報収集では不明瞭であったため、「高塚西古墳」という遺跡名で当時の森高清次館長を責任者とした発掘届を菊池市をとおして県および国に

提出している。

(2) 調 査

発掘調査といつても小規模なもので、学芸員の富田が当時熊本大学生であった板橋和子氏と田中好美氏の応援をえて昭和42年10月5・6日の2日間実施したものであった。当時は自家用車とてほとんどなかった頃であり、菊池電車で菊池駅まで行き、駅から現場まではスコップをかついで徒歩で通ったものであった。

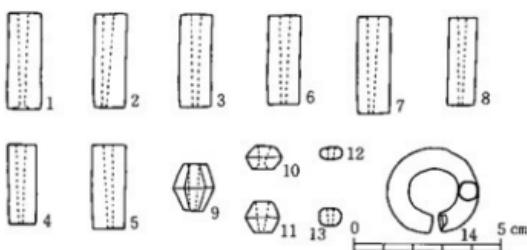
このような状態であったため、調査は石室内の床面が露出している北半を清掃し、その状況を実測図に記録することを目的としたものであった。墳丘の測量はおこなっていない。床面には石材や土砂の堆積はほとんどなく、腐葉土程度のものが薄く覆っていたのみであった。遺物の検出も少なく、攪乱のなかから砥石が1点と須恵器高杯破片1個体分が出土したのみであった。このような状態ではあったが、石室破壊時および遺物の採集時にはほとんど床面の攪乱はみられなかつたらしい。石室は南西側に玄門がありそれに連続して西側に側壁が一部、北東側の奥壁下部が根石のみ残存していた。

石室の平面形は長方形をなしている。その隅にあたる部分は北西部と北東部を調査している。北西部では隅丸に構築されているが、北東部では北壁を失っていて明確ではないが奥壁の遺存からみて直角にちかいものと考えられる。石室は南北を未調査であるが長径方向の調査部分の長さが2.32m、短径にあたる奥行きが1.97mを測る。はたして南半部がどの程度埋もれているのかは不明瞭であるが、片袖式の横穴式石室ではない。この石室は玄門を中心として復原すると長軸が3.76m、短径は1.97mとなる。その長軸方向は北西—南東である。長辺の南西側に玄門が作られている横穴式石室であった。床面には屍床の区画は見られなかつたが、玄門北側の用石の延長上にあたる部分に北東—南西方向の浅い溝状の窪みがあり、あるいは屍床区画の板石かなにかを立てた痕跡かとも考えられた。しかし、南側にはそれはみられず、あるいは破壊時またはその後のものかもしれない。

玄門は縦長の石を両側に立てたもので、これが直接渓門となるものか或いはその南西側に渓道が続いていたものか、石室外は発掘していないので不明である。ただ、玄門の南西部の墳丘からみると上部を失った短い渓門が付いていた可能性が強いと考えられる。北側の玄門は床面から1.7m、南側のものは1.08mを測る。その間隔は0.48mであった。側壁は横長の割石をもちいて築いており、玄門の北から北西隅にかけてはやや残存状態がよく、床面から1.23mの高さまで残っていた。使用されている石材はすべて阿蘇溶結凝灰岩で、玄門以外は、長さ30~50cm程度の小さなものである。しかし、一部には奥壁の下部に確認したようなやや大きめのものもみられる。

(3) 出土遺物

この古墳から出土した遺物としては装身具類・土器・鉄器・砥石があるが、このうち発掘で出土したものは砥石と須恵器高坏破片のみでそれも原位置を留めた状態ではなかった。そこでこれらがどのような場所にどのようにして副葬されていたかは判らない。

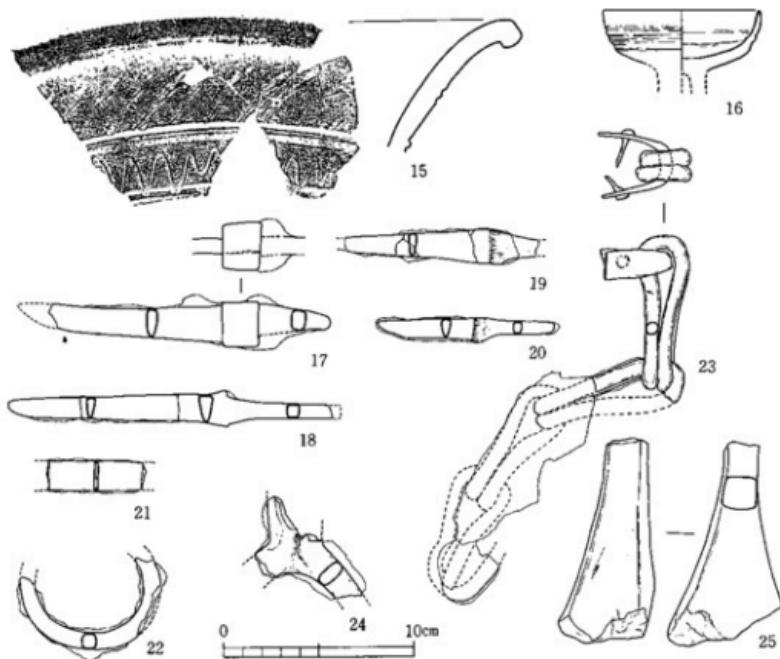


第18図 装綾尾茶臼塚古墳出土遺物実測図

装身具のうち管玉は8点出土している。いずれも碧玉製で太身の良好な製品である。その大きさは1長さ32.8mm・径11.7mm、2長さ31.6mm・径11.5mm、3長さ32.2mm・径11.4mm、4長さ30.4mm・径11.5mm、5長さ33.3mm・径11.6mm、6長さ29.8mm・径10.1mm、7長さ27.8mm・径9.7mm、8長さ29.2mm・径11.9mmを測る。その孔はいずれも片方が広くなり「V」字状をなしている。水晶の切子玉9は1点出土し、長さ16mm・径14mmである。同じく水晶の算盤玉状をなすものが2点出土し、10は長さ8.2mm・径12.5mm、11は長さ10.2mm・幅11.5mmを測る。ガラス製の丸玉は2点出土しており、12は淡青白色をなしており高さ4.2mm・径7.3mm、13は高さ5.7mm・径7.3mmを測る。このほかにガラスの小玉が7点出土している。あまりにも小さいために図示を省略したがその大きさは次の通りである。やや透明な碧色のものが2点あり、高さ2.4mm・径3.5mmと高さ2.4mm・径4.4mmである。半透明な碧色のものが1点あり、高さ1.9mm・径3.4mmである。半透明な青色のものは4点あり、高さ1.8mm・径3.1mm、高さ2.8mm・径4.1mm、高さ2.5mm・径4.5(3.5楕円)mm、高さ1.7mm・径3.2mmを測る。金環(14)が1点出土していて、それは長径31mm・短径29mmを測り、管身の径は約6mmである。これをみると良好な管玉が多いわりにはガラス小玉が少ないような気がし、恐らく発見時には大きめの玉類のみが目について採集されたものと考えられ、小さいものは拂土とともに掘り上げられたのではなかろうかとみられる。

土器としては須恵器が2個体分出土しているが、いずれも破片である。15は大型の變形土器の口縁部破片で、復原口径は、48cmである。口縁部端はやや肥厚し、その下に2本の沈線、その下に櫛描き波状文、その下に2本の沈線がみられる。16は高坏の坏部破片で調査時に3片の破片として擾乱土中より発見したものである。脚部は失われている。口径82mm、坏部の深さ25mmを測る。表面下部に2本の沈線が施されている。いずれも須恵器第Ⅳ形式に属するもので、この古墳の年代を知るために重要な資料である。

刀子は4点出土している。17は先端を欠いたもので現存長148mm(復原長172mm)・最大身幅



第19図 裂縫尾茶臼塚古墳出土遺物実測図

約19mmを測る。関部に柄口金具とみられる縦24mm・幅25mmの鉄製の輪が付着している。刀身には反りがあり、やや研ぎ減りしている。18は中茎の先端を欠いたもので現存長170mm（復原長175mm）・刀身最大幅19mmを測る。棟部にも関が存在する。刀身にはやや研ぎ減りがみられる。19は先端と中茎端を欠き相当に研ぎ減りした刀子で、現存長102mm（復原長135mm）・刀身最大幅18mmを測り、関部に木質が残っている。20は完形の刀子で、全長は94mmと短く、最大身幅も10mm程度である。関部あたりに木質の銷付が認められる。

21は両端を欠く長方形の鉄板状の製品である。幅20mm・現長52mm・厚さ約2mmを測る。本来の形態は不明である。

22～24は馬具とみられる金具である。22は長径74mm・推定短径67mm程度とみられる輪状をなすもので、鉄製素環状の鏡板とみられるものである。23は先端に釘止めの金具をもつ兵庫鎖である。片半部は鎖が塊状になり鉄素材部の観察ができない。鎖の1単位の長さは80mm程度である。24は鉄製品の一部の破片で、現存部が三つ又状に分かれている。下部に向けて図示した部分には湾曲があり、或いは輪鎖の破片ではないかとも考えられる。

25は俗に天草砥石とよばれる流紋岩の砥石で断面方形をなし、研ぎ減りした中央とみられる

部分から折れている。現存の長さ105mm、最大部幅60mm、折損部は19×18mmである。

これらの遺物はいずれも後期横穴式石室や横穴の出土遺物に共通性をもつものである。特に出土した須恵器により6世紀後半代の時期のものであることが考えられる。他の玉類や鉄器もその年代と矛盾しないものである。

なお、これらの遺物は調査時出土のものに調査前出土のものを加えて、当時の森高清次館長名で菊池警察署および文化財関係官庁に遺物発見届を提出している。昭和57年9月19日発行の熊本市立熊本博物館『収蔵資料目録—考古・歴史・民俗』28ページの50「管玉一括—熊本県菊池市高塚西古墳出土」としたものがそれにあたる。

(4) 小 結

この茶臼塚古墳の特徴は石室の構築と小規模の割りには副葬品が豊富であることがあげられる。まず、石室の平面形が調査で確認した部分だけでも奥行198cmに対して幅が232cmあり、玄門の中央から折返して左右対称に復原すると幅が376cmにもなる。このように幅が広く、長辺に羨道がつく横穴式石室の構築はこの地方では類例のはなはだ少ない古墳であるといえる。また、この古墳の石室は玄門の北側に残存した側壁の状態からみて、非常に構築が粗いといえる。この時期の横穴式石室で阿蘇溶結凝灰岩をもちいるものでは一般に巨石墳と呼ばれるように、大きな石材を用いるのが通例であるが、この古墳の場合は玄門を除いて小さなものを使用しているのも特徴である。

このように小規模であるのに反して、副葬品は驚くほどとまではいかないが、今回確認されただけで装身具や刀子・馬具などをもっている。石室の破壊の状態からみて、ここに報告した副葬品が全てであるとはとても考えられず、ほかにも存在した可能性は強いとみられる。この程度の遺構の確認や遺物の状態では被葬者の推定まではできないが、他の古墳とはいさか趣をすることにするようである。今後、菊池川流域の古墳時代研究の参考となる遺構であり資料であると考えられる。

以上紹介したように、丁度20年前の調査報告を完了して、いさかホットしたような気がしている次第です。この古墳の調査および出土遺物は古墳所在地である菊池市の市史の編纂でも氣づかれなかつたらしく、その出版後に編纂のことを知つておればお知らせできたのにと思ったものであった。ここにやっと報告の機会を得たことはまことに幸であった。この報告の機会を与えられた熊本県教育委員会および担当の松本健郎技師に感謝申し上げたい。また、調査の機会を与えられた当時の森高清次館長・宮本勝哉事務長ほか現在の西岡鐵夫館長をはじめ関係者各位に心から御礼申し上げたい。

V 考 察

1 裂縫尾丸山古墳の構造と規模

裂縫尾丸山古墳は、小さな丘陵の先端部に築かれた円墳である。この丘陵は途中が鞍部となり、古墳の立地する先端部は独立丘陵状を呈している。古墳はこの自然の地形を巧みに利用して築かれている。墳丘の造成に当たってはほとんど盛土を行わず、丘陵を削り出して墳丘を形成している。丘陵の地質は、軟質の凝灰岩である。墳丘部の調査では、表層に僅かに腐食土壌、二次的な堆積土がみられたが、その下はこの丘陵の地質基盤である軟質の凝灰岩である部分が多かった。

墳丘は、近世以降にたび重なる擾乱を受けており、墳裾部は不明確な部分が多くあった。従って、墳丘の規模・墳形も不明確な点もあるが、直径が約20mのやや不正な円形であったと考えられる。調査時の古墳は、三段築成状になっていたが、これは後世の開墾等によるもので、本来の段築ではない。本来の墳丘は概ね上二段の部分に相当する。中央の段は古墳の裾部にあたり、築造時のものと考えられるが、開墾などによって多少は変形しているものと考えられる。

周溝、葺石、埴輪などの外表施設はないが、ここで裂縫尾高塚古墳の横穴式石室から発見された石製品が問題となる。裂縫尾高塚古墳から発見された石製品については、先に詳しく説明しているが、これは櫛石として当初から用意されたものではなく、軽の石製品を転用したものである。発見された石製品は左右対称ではなく、側縁部の加工痕からみても一側片（第15図左側片）は転用時に二次的に加工されている。

可能性として考えられることは、高塚古墳に立てるはずのものを転用したか、他の古墳から転用したかの何れかである。しかし、単なる石材の不足から、高塚古墳のために製作された石製品が転用されたとは考えがたい。よほど石材不足であればその余地もあるが、背後に豊富な石材産地を控えているので、石製品の製作の手間を考えると不合理窮まりない。しかも、石製品の樹立は、古墳の造営の中で重要な意味を持つもので、単なる転用では理解できないものがある。

他の古墳からの転用だとすれば、遠方の古墳からではなく、隣接の古墳からの可能性が高い。後に詳しく述べるとおり、茶臼塚古墳は高塚古墳より後出するので、丸山古墳から転用された蓋然性が高い。丸山古墳の調査に当たり、その痕跡がないかどうかを注意したが、石製品は基部からそっくり抜き取られており、丸山古墳の墳丘部の擾乱も著しくその確認はできなかった。

昭和53年度の調査所見には、後補材の可能性もあるとの指摘があるが、石室の構造や、側面の二次加工などを見ると、後世の修復とは考えがたく、石室構築時に転用されたものであろう。主体部は墳丘以上に擾乱が著しく、10回以上の盗掘・擾乱を受けており、掘方も含めて完璧

にちかく破壊されていた。幸い、掘方の一部が僅かに残っていたが、その状態からみると小型の主体部であったことが窺われる。しかも、掘方の状態からみると、横穴式石室のように狭道のある構造ではなく、石棺を含めて竪穴系統の構造である。主体部の擾乱部分、及び墳丘部で検出された石材は、凝灰岩の割石が多く、他に川で採集した変成岩の塊石があった。これらの石材には、赤色顔料が付着しているものがある。

凝灰岩は、灰褐色を呈する硬質のもので、この当りでは稗方石と呼ばれているものである。台地の縁辺部には至るところに凝灰岩の露頭がみられるが、石材の特徴からみて古墳の東北方の稗方周辺から採掘したものと考えられる。

残っていた石材は多くはないが、これらを見る限り石棺ではなく、竪穴式石室と考えられる。掘方の規模からみて、石室の規模は小さく、長さは2m前後と推定される。このことは、次に述べる古墳の年代とも深く係わってくる。

2 裸尾丸山古墳の年代

裸尾丸山古墳の年代を、出土遺物と内部主体の面から検討してみたい。

出土遺物は少なく、これらの遺物がこの古墳の全体像を示しているわけではないが、概略の把握にはほぼこと足りる程度の遺物は出土している。須恵器にみられる年代幅は約1世紀におよび、かなりの年代幅がみられる。もっとも古いものは6世紀前半のもので、6世紀終末までのものが出土している。

土師器は、須恵器を模倣した蓋杯が多く、6世紀後半のものが主体であるが、盤（第11図37）などは6世紀前半に位置づけられるものである。

刀子、玉類などは、それだけで年代の決め手とはなしがたいが、管玉は細身であり、茶臼塚古墳のものと比較すれば相対的な関係は明白である。

丸山古墳の主体部は著しく破壊されていたが、小型の竪穴式石室と考えられる。かって、県内の竪穴式石室を整理し、その年代観などを検討したことがあるが、その結果ではこの種の石室は5世紀後半を中心とし、6世紀初等頃には姿を消すものと考えられる。^{注1}

これらのことから集約的に考えれば、5世紀に遡る要素は薄く、6世紀前半の築造とみるとができるよう。その後、追葬が行われたか否かの判定材料はないが、遺物は築造後のものも含まれており、追葬あるいは葬送の儀礼が行われたことは明らかである。

註1 阿部堅二・今井義量・三島 格・松本健郎他「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号 1978

3 瓢婆尾古墳群の形成（台台地の古墳の動態）

瓢婆尾古墳群を形成する3基の古墳は、墳形はすべて円墳であるが、丸山古墳は盛土を行わず丘陵を削り出して造り、他の2基は盛土によって墳丘を造っている。

内部主体は、丸山古墳が小型の竪穴式石室、他の2基は横穴式石室であるが、高塚古墳は複室、茶臼塚古墳は单室である。高塚・茶臼塚の両古墳とも主体部の石室は破壊が著しいが、平面プラン・石積みなど、構造面で大きな違いがみられ、この点からみても茶臼塚古墳が後出のものとみることが出来る。

出土遺物でみても、丸山古墳→高塚古墳→茶臼塚古墳の流れがみられ、内部主体の変遷と対応している。

資料的な制約はあるが、瓢婆尾古墳群の築造年代は丸山古墳が6世紀前半、高塚古墳が6世紀中葉、茶臼塚古墳が6世紀後半と考えられる。すなわち、ほぼ1世紀の間に3基の古墳が営まれたものとみることが出来る。3基の古墳は、同一系統のもので、6世紀にはこの地を墳墓の地と定め、3世代にわたって築造されたものと考えられる。

台台地の中での古墳の流れをみると、年代の古い古墳は箱式石棺（山崎古墳2号・十五社宮古墳）、舟形石棺（山崎古墳1号・馬頭古墳）、家形石棺（山崎古墳3号・十蓮寺石棺）を内部主体としている。これらの石棺は、基本的には箱式石棺→舟形石棺→家形石棺と展開するものであるが、実際にはかなり錯綜した展開をするのであろう。この点については、昭和62年度に馬頭古墳の発掘調査を予定しているので、資料を整えて考察してみたい。

6世紀後半代には高塚古墳・茶臼塚古墳の横穴式石室があり、次いで台地縁辺部の横穴群へと展開する。横穴群に関する資料は少ないが、先述した堀切周辺から出土したという土器類（熊本市立博物館蔵）の古いものは、高塚古墳と茶臼塚古墳との中間に位置するものである。従って、茶臼塚古墳と横穴群の一部は並行関係にあり、一元的に展開しているのではない。

台台地の古墳で、墳形の明らかな古墳はすべて円墳で、前方後円墳はみられない。このことは、台台地を中心とする菊池川上流部右岸の地域性を反映しているもので、菊池川中流域の古代社会を考える上で興味ある事象である。

図 版



調査参加者



1 台台地全景（西方から）



2 袈裟尾古墳群（工事後）

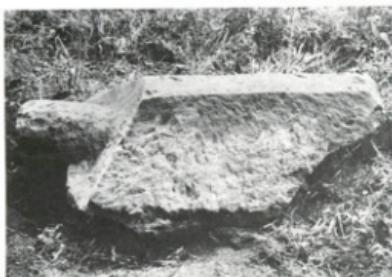
図版1 台台地・袈裟尾古墳群航空写真



1 岡田の巨石（支石墓参考地）



2 山崎古墳 3号石棺



3 山崎古墳 3号石棺



4 山崎古墳 3号石棺



5 十五社宮古墳



6 十五社宮古墳の石棺材

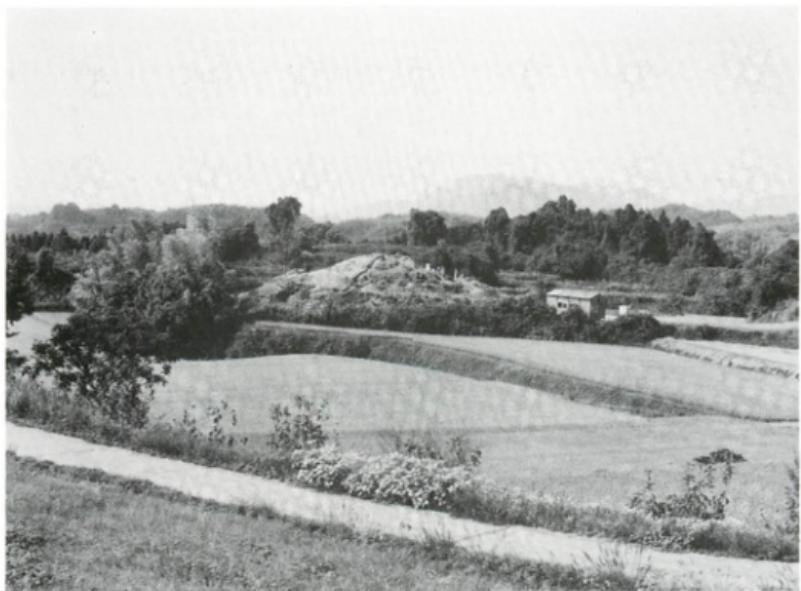


7 台古墳



8 稲之口(A)横穴群

図版2 周辺遺跡



1 高塚古墳（南東）から見た丸山古墳



2 東から見た丸山古墳

図版3 裂縫尾丸山古墳の墳丘

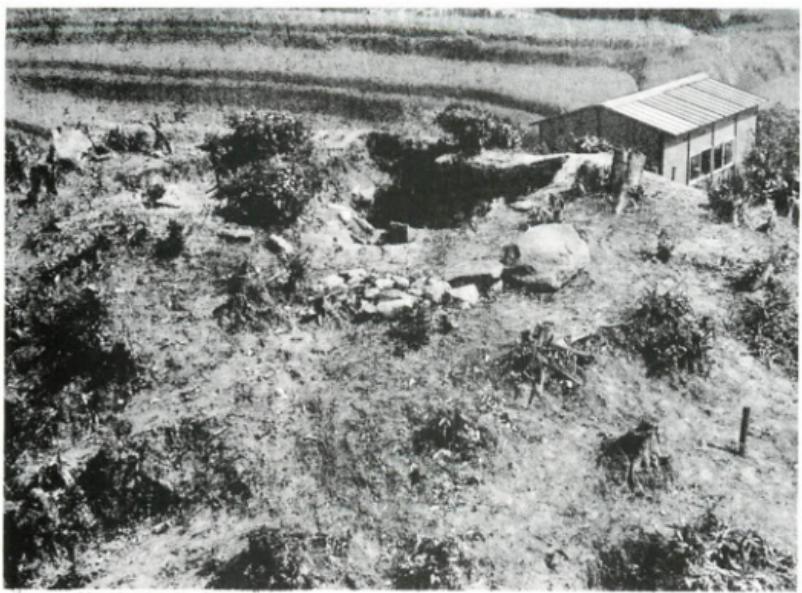


1 丸山古墳の墳丘（調査後）



2 丸山古墳から高塚・茶臼塚古墳を望む

図版4 裂縫尾丸山古墳の墳丘と周辺の古墳



1 填顶部の状態（試掘後）



2 填顶部完掘状態

図版 5 裂裘尾丸山古墳



1 盜掘坑断面と石材の出土状態



2 石材の出土状態

図版 6 裂縫尾丸山古墳の主体部



1 主体部完掘状態



2 主体部完掘状態

図版7 裂縫尾丸山古墳の主体部



1 階段状遺構の検出状態



2 階段状遺構土層断面

図版 8 階段状遺構

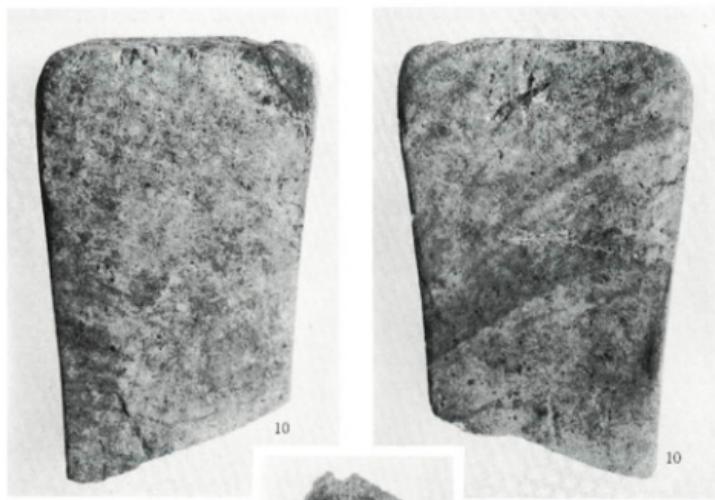
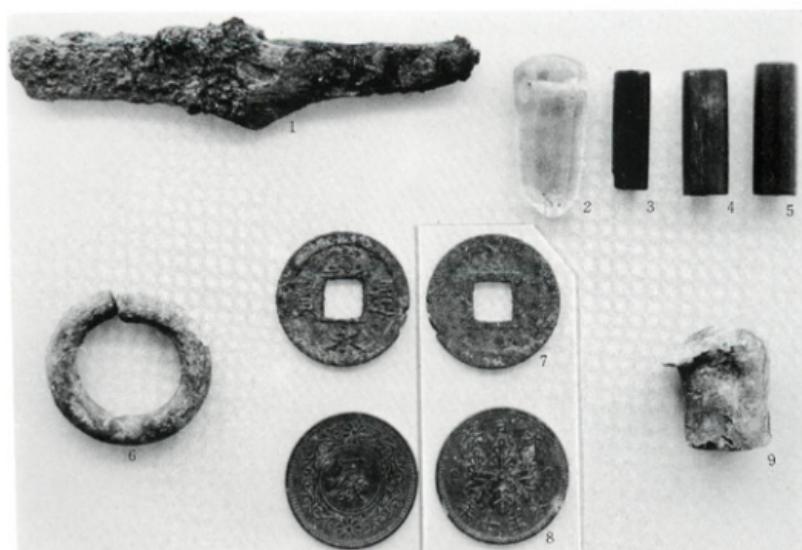


1 天井石と思われる石材

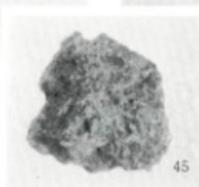


2 出土した小砾（礫床）

図版9 丸山古墳の出土石材



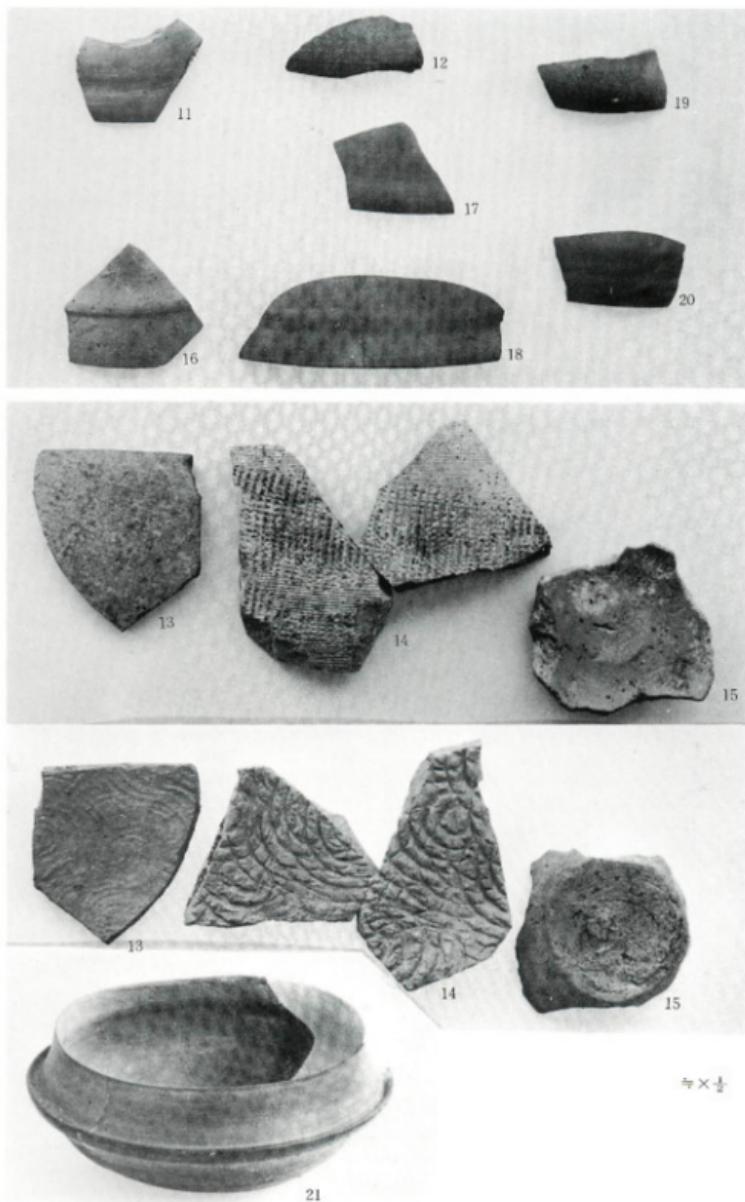
番号は挿図と対応



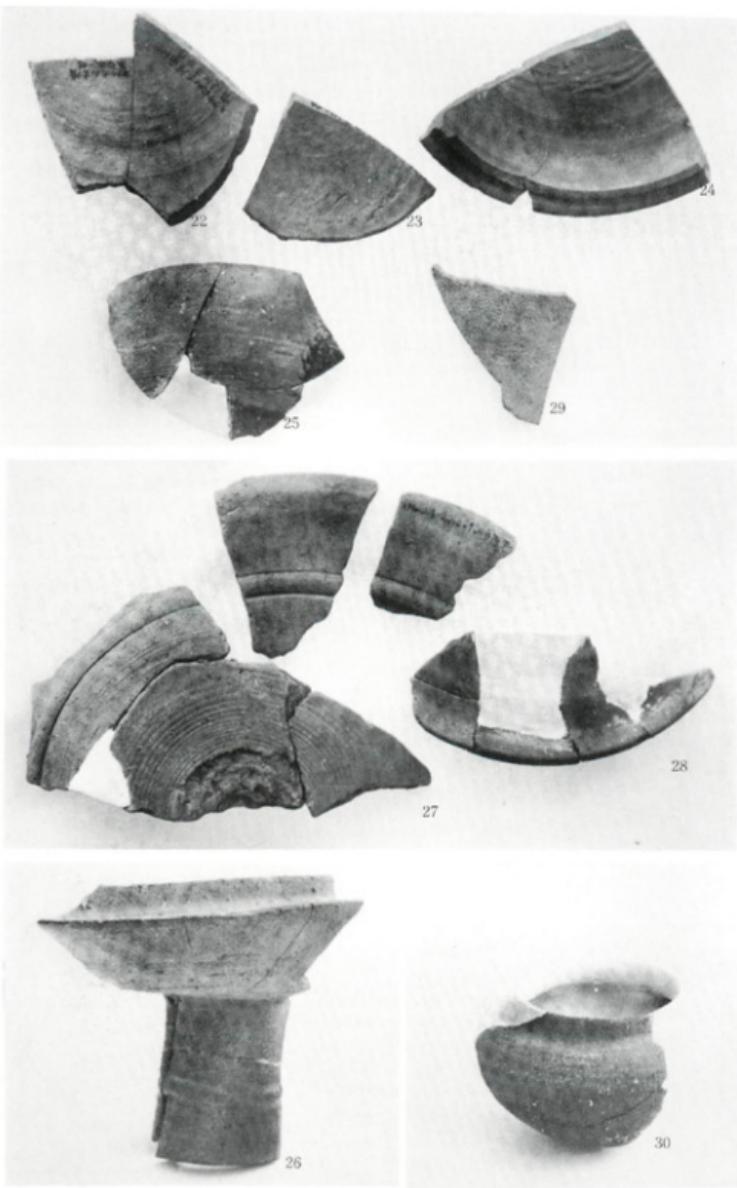
1~9、45 $\times 1$

10 $\times \frac{1}{2}$

図版10 製縫尾丸山古墳出土遺物

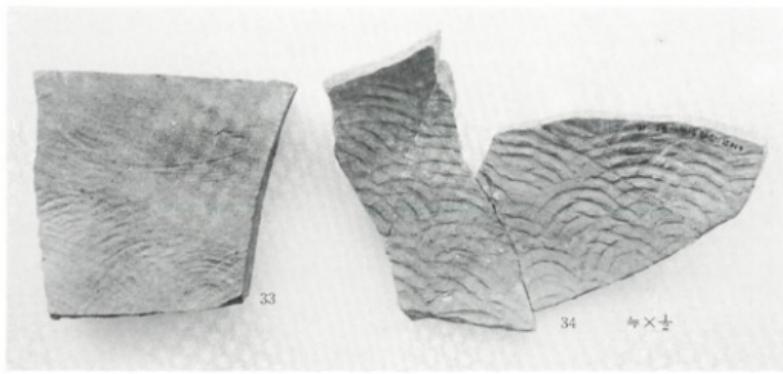
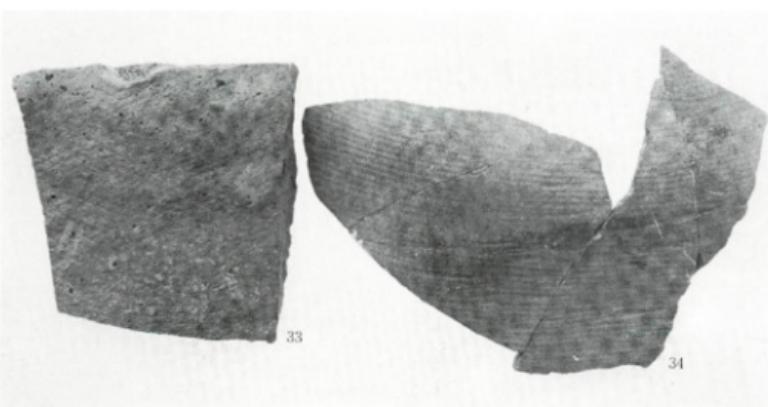
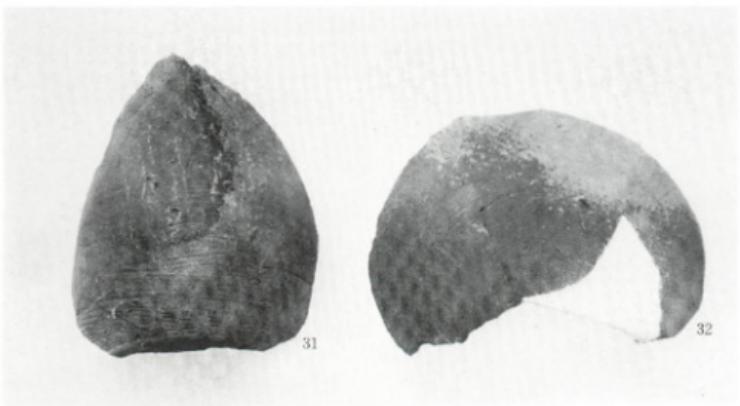


図版11 製縫尾丸山古墳出土遺物

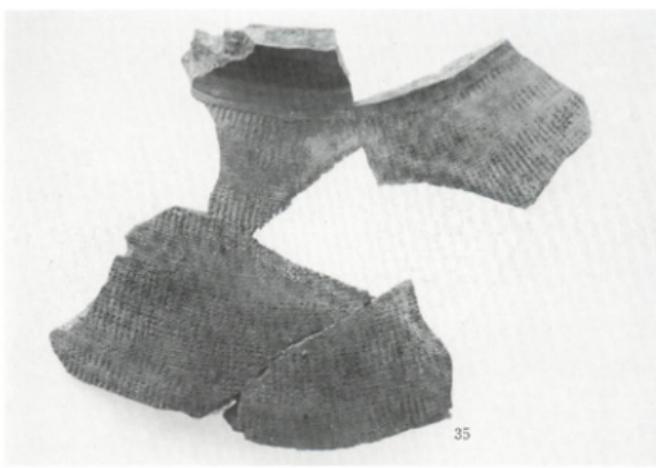


图版12 姫姬尾丸山古墳出土遺物

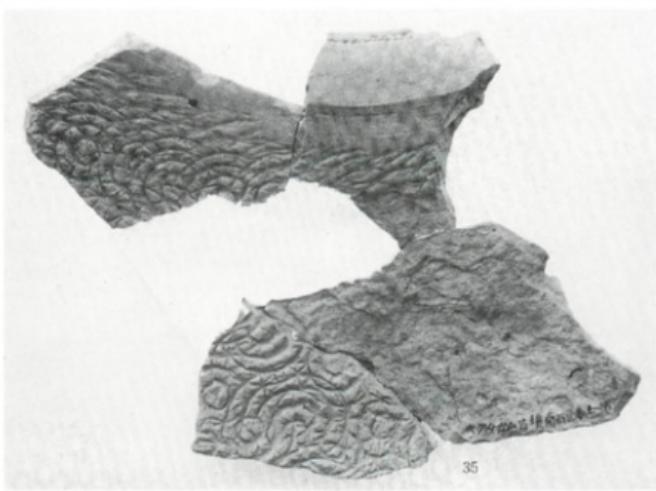
× $\frac{1}{2}$



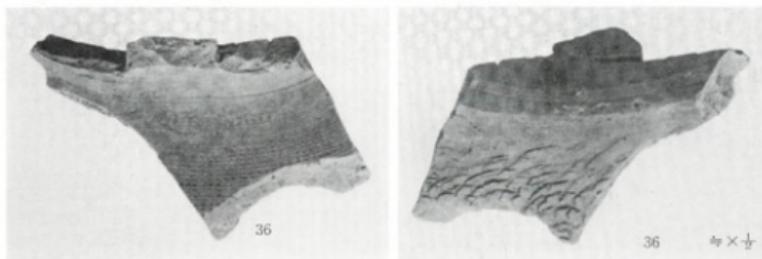
図版13 裂縫尾丸山古墳出土遺物



35



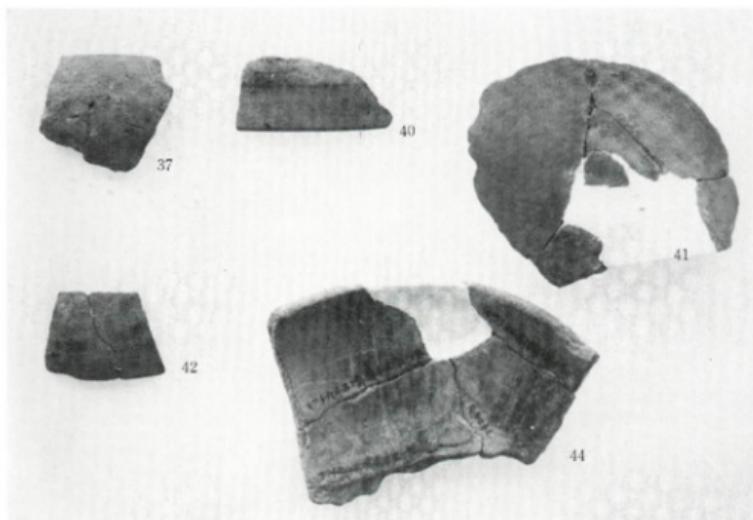
35



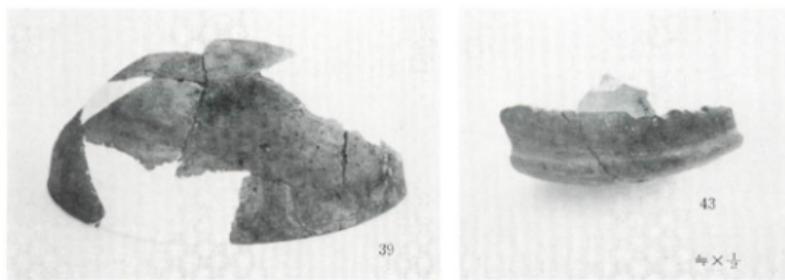
36

36 $\times \frac{1}{2}$

図版14 製縫尾丸山古墳出土遺物



40 (縹の压痕拡大)



図版15 袋綾尾丸山古墳出土遺物



1 調査前の墳丘



3 玄室



2 墳丘と石室



4 玄室根石の状態



5 棚石として使用されていた
石製品



6 復原された墳丘

図版16 裂縫尾高塚古墳



1 塗丘上の石材



2 玄室奥壁根石の残存状態

図版17 裂縫尾茶臼塚古墳

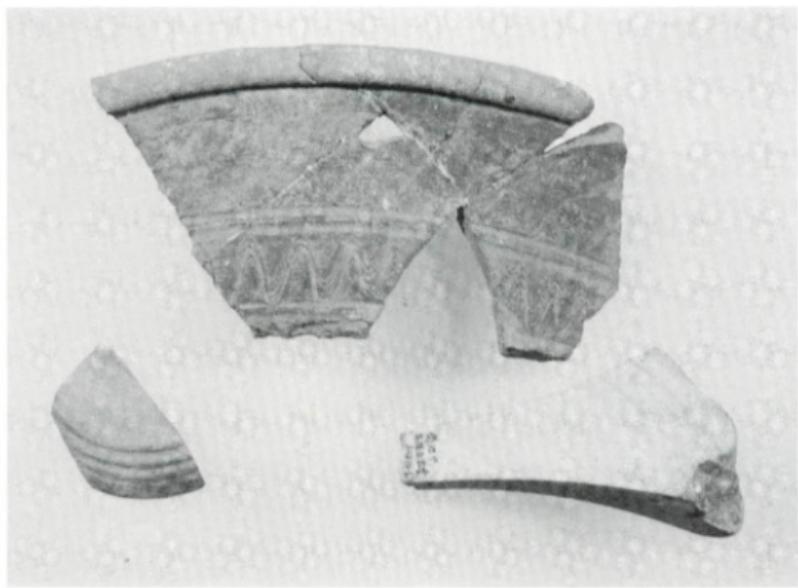
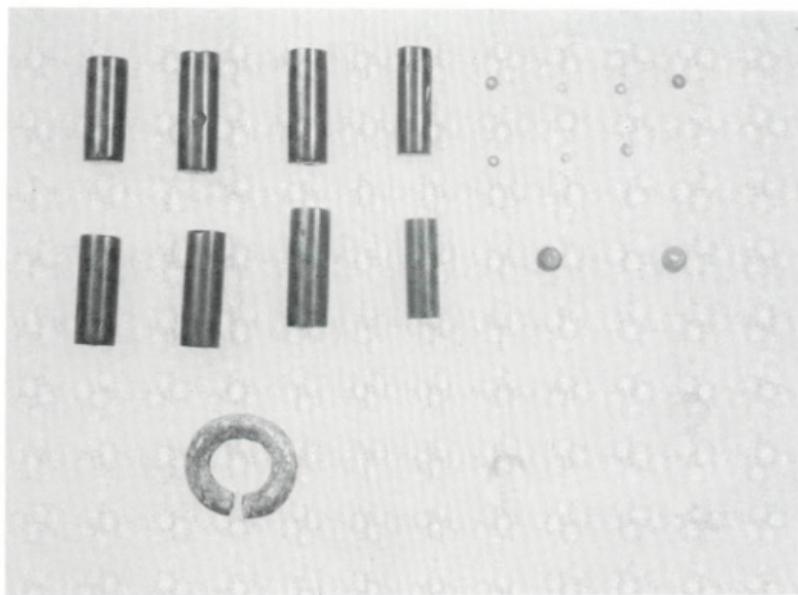


1 玄門から北側の側壁残存部

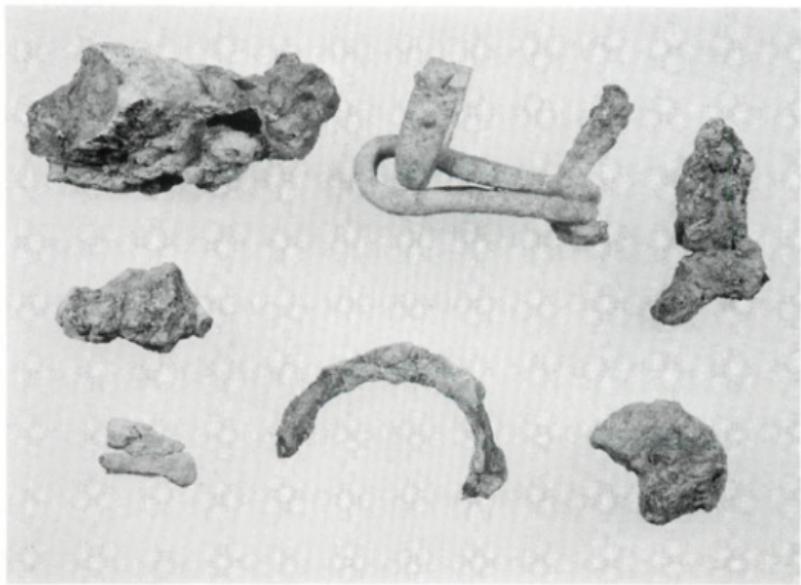
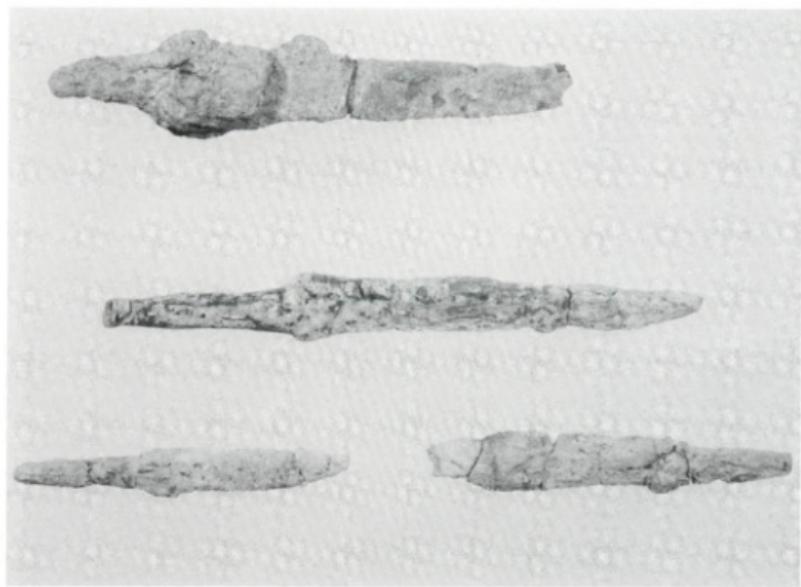


2 側壁の石積み

図版18 製造尾茶臼塚古墳



図版19 蕺姿尾茶臼塚古墳出土遺物



图版20 羌族尾茶臼塚古墳出土遺物

熊本県文化財調査報告 第89集

製 紋 尾 丸 山 古 墳

昭和62年3月31日

編集・発行 熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印 刷 口 二 一 印 刷
〒860 熊本市二本木3丁目12番37号
TEL 353-1291

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 89 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：袈裟尾丸山古墳

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日